增補雅言集覽 三十五

813.6
I619g
W Nxg

813.6
I619g
Nx

国立国会図書館
41.3.31

691351

増補雅言集覽巻之卅五

石川雅望 集
中島廣足 補

○也の部

や ノヤ ノヨ 源若紫九 こちやといへばついるたり同帚木七 やれらりは身をもてなしふるまひさるいとやをらりなりや同紅葉賀十八 こちやといへどおぞろりを枕二九 あさ座のかうし清範りう座のうへも光りをちたるこゝちしていみじくぞあるや同十二 扨其廿日あまりに中納言の法師はなりたまひはしこそ哀なりしりさくらなどの散ぬるも猶よのつねなりや源帚木十 いとゆかしく思事もなしや同廿二 いとやすらりなる御ふるまひなりや同橋姫十九 申させ侍らんとてさつそくしやとめしよせて枕九廿八 「みな人ゝ花やてふやといそぐ日も我こゝろをぞきそぐりける源夕顔一卅 おぞしやるりたぞおきや同卅九 いきとまるまでき心ちそれとの給ふものさのもしげなしや同若紫十八 ゝなれ侍りはけりやと聞え給ふ同玉鬘十二 きこえひゞめ給ふめりやと同柏木四十四 はゐひぞ人は似ぬやとうちさゝめきて同常夏十四 ゝとゞめてぞおとしめ給ふや榮鳥の舞七 こんゝるりの簫や琵琶やさ

うのふえひちりきなどふきあいせたるい（源竹川）卅九　ふやうをるやと（同夕霧）四十二　花やてふやとりけてこそあらめ（同末摘花）十三　あはやうやとよづけるにぢからで

や　あれ。宣長云ヤハナドヽ同格ノあれやナリ（源早蕨）十四　「ーやざるゝあまの衣ま　まとあれやうきさる波まぬるゝこげ袖（古）戀一　「おもふともこふともあいんものな　れやゆふてもたゆくとくるーたひも

や　家（空穂藤原の君）廿八　すみ給ふやいみまのりやゝりたーいつちあこたれーとこめ　くりいひりきなげや（枕）十二、六　屋いまろやあづまや（古事記）下、卅四　其老嫗所住屋者　（源若むらさき）五十一　ひゝなゝとこざとやどもつくりつゞけて（同明石）五。雷ノ落ウタル所　ーろのかさある大炊殿と覺ーきやまうつー奉りて上下とあくたちこそていとらう　げいーくあきとよむ聲いりづちまもおとらぎ（大和物）四、アシカリノ段　家の有ーこたりを　みるま屋もあーー人もなーいづりたへいまけんとりあーうおもひけり（貫之集）卅九　あ　るいやのうちま入あるい庭まおりたちて補（職人尽哥合）組し「屋おもてまーこー　見えつる月影のせとまなるまでふけめぐるりあ

りへらや　らとやとの間に　むをむさむあり（土佐日記）土佐ヨリツキテクル童ノ舟ウタ　おほこそ國のりたいこやらる　れこがちゝこゝありとーおもへばりへらやとうさふぞあいれある（同）舟哥　りへら　やよむへのうあるもりあせまこもん（抄）催馬樂のさきんざちやといふま同ー

や　聲也（蜻蛉日記）一（後拾）誹諧「おもひいづる時もあらじとおもへどもやといふ　ままこそおどろりれぬれ（著聞）十六、廿三　ある日越前げ額まりさの出來たりけるを備後ま　むりひてやおつぞ孫此りさみてさび候へさをげ御身ぞーらせ給いんといひたりに　るを（源帚木）卅九　やとおびゆれどりやまきぬのさいりておとまもさてぎ（同若紫）四十六　このゝる朝霧をべーらでいぬるものりとて入給へばやとも え聞えぎ（宇治拾）十五、九　やく左のめまいさつき立まけり海賊やといひて扇をなげにてゝのにざままたふれ　ぬ補（新續古）十九、寄箭戀、公忠　「梓弓引もとむべき別路をやといひーまもかへらざるらん

や　矢　響矢おりや　靡めー

○このぶらや（万）九、五　「きのくまの昔弓をのりぶらもて鹿とりあびく坂のうへまぞ　ある

○とゞりや（宇治拾）十二　女ままとまとらふーたりとゞりやをもげて片膝をさてゝ　虎　るたり云々をのこ矢をもげて音もせでるされば

補　や　よびいづるや（俊頼集）「石川やもあざの帶の中たえばこまれわさりの人まりさらむ

（和泉式部集）「いとゝやこひのみさたる心にいたえまありともおぼえざりけり（後拾）雜五、六條院宣旨「ゆふゝでやゝげき木のまをもる月のおぼろげあらでみえゝりげゝ

補 やいと 灸（隆信集）二りやうゝいひりゝを程ゝ例ならぬ事ありてやいとをおぞゝけるゝ又この女もひるくふよゝを聞ていひやりゝ「朝霧のひるまゝいつぞあきりせゝよもぎのあともおもひそどれぬゝへゝ「そどるらんよもぎのあとのくるゝさゝ霧のひるまもいつとゝられぞ

補 やいでめ 燒米（定頼集）やいこめ「あおうやいこめてぞたゞゝやそなまゝかくつらゝらん物とゝりせゝ（落くぼ）一ゑぶくろふたつゝて云々かみへゞてゝやいこめいれて（空穗 國讓）上、七 爪燒米 氷葱 海松 茨 十六 うりやいでめおぎそるそづふゞきおど奉れ給へり云々やいでめゝおうおの齒いさてかみのこゝさるゝりうどの御もとゝとあり云々やいでめゝ大ゲそゝまおそゝ（蜻蛉日記）下、たまさりあるあまゝにやいでめもりぞゝづりゝゝさる

やゝ（新古）雜下 西行「いりゞをべき世ゝあらばやゝ世をもそてゝあおうのよやとさらにおもゝん○宣長云二句やもゝあもれおどいふでとく歎息の詞あり此詞哥ゝめづらゝれどおのころほひの書どもゝをり〳〵そえさる詞あり一本ゝ此やゝをそとぢめを思ためとあるゝ聞えやゝけれどそゝやゝゝてゝ聞えゲたゝとおもひて後の人のあらためたる成べゝ

やゝら（宇治拾）九、一 いもねられざりければやゝらおきてたゝぞそありくゝ（同）七、五 のどりゝきてさゝぐ人よどそれればやゝらあゆそよりたるゝ（同）頭をもたゞておきんとゝければやゝら手をりゝておこゝぬ（同）七、五。馬所のぬをそたるりあといれんもよゝおゝやゝらこれをうりてばやと思ひて 補（宇治拾）三、二 入されども猶ものゝおそろゝければやゝらあゆそよりてそれば（同）一僧のやゝらよりてなどりうゝおりせ給ふぞ（同）二ノ廿四 そとこのいびきをるりたへやゝらのぞりてまぜて

やゝらり（千載）戀三「やゝらりゝゝぬるよもおくてわりれぬるよゝの手枕いつりわすれん（催馬樂）貫河 ぬき川のせゞのやゝらさまくらやゝらりゝぬるよゝおくておやさくるつま（源帚木）十一 さゞひさぶるゝこめきてやゝらりならん人をとりくひきつくろひてゝおどりそざらん（同）卅九 いとやゝらりゝの給ひて鬼神もあらざつまゞき

御ゐもひあれば（同うつ蟬）七ゑなーづまれる夜の御ぞのけゝひやゝらゝなるーも
いとーるゝりゐり（同若紫）四十女ゝこゝろやゝらゝあるらんよきあど今よりそー
へ聞え給ふ（同夕霧）十九　ゝらうたゞゝやゝらゝある心ちー給へり（同夕顔）十二　六人のゐゝ
ひいとあさまーくやゝらゝにおほときて

やゝらづゝ（源薄雲）卅四　やゝらづゝ引入給ひぬるけーきあれば。やゝらづゝといへ
る詞此外ゝをえたる事なーもーうつーあやまれるゝや

補　やゝらぐる（新古）神祇西行「さやゝあある鷲の高ねの雲ゐより影やゝらぐる月ゝその
杜（美濃家つと）四の句ゝ佛のゝりゝ神とあらゝれさるゝーあり（同）神祇慈圓「やゝら
ぐる光ゝあまるかゞなれやいをゞ川原の秋のゝの月（同）同同「やゝらぐる影ぞふも
とゝくもりあき本の光ゝをねにをめぞも（美濃家つと）をべて神祇の哥ゝ影やゝら
ぐる光やゝらぐ塵にまゞゝるなどゝよむ詞ゝから書老子ゝ和光同塵といへるゝり出
て意ゝ佛の道の意ゝてゝめるひゞこと也神ゝさるゐとあらんやゝそもゐふーのゝ
まんゝ猶さも有べゐをほふーのいふゝあらひてたゞ人もつねゝゝよむこゝとゝなれる
ゝいとゝゝさもらいゝきゐざありゝゝらー。此事玉あられ（夫）十八、土御門内大臣「ーめのうちゝ
月の光をやゝらゞてゝさまのちりーく庭の雪ゝあ

やゝらぎ（源匂宮）十一　かゝるゐどにをこーなよびやゝらぎをぎてをきさるかたゝひ
ゝれ給へりと世人ゝおもひ聞えゝり（古）序　男女の中をもやゝらゞ

補　やゝぐ（著聞）十二廿　門のもとゝ柿の木のありける下ゝ此師かたて矢をげて立たる
やゝ〳〵（源玉鬘）廿八　母君ゝたゞいとわゝやゝゝおゐどゝゝてやゝ〳〵たをやぎ給
へりー（同若葉）下六十二　おつゝーくらうたゞゝやゝ〳〵とのみゝえ給ふ

やゐゝ　八百日

やほよろづ　八百万（万）二長哥　天河原爾八百萬千萬神之神集集座而

補　やゐゝで（順集）「庭見ればやゐたで生てあれゝけりからくーてたゝ君ゞとも
ぬゝ

やへたつくも（源橋姫）十二「世をいとふ心ゝ山ゝゝよへどもやへさつ雲をきみやへ
たつる（新古）雑下、天暦御歌「をやこよりくもの八重たつおく山の横川の水ゝををよゝる
らん

やへむぐら（後）戀六、よみ人しらす「やへむぐらさーてー門をいまさらゝ何ゝくやーくあゐ
てまちけん（古）雑下（拾）戀二「今更ゝとふべき人もおもゐえゞ八重むぐらーてかどさ
せりてへ

補 やへうのむな（隆信集）又五月五日やへうの花にあやめをくゝて云々「めづらしきやへうの花のめうつりは心もひゝぬあやめ草ゝな

補 やへのくみげき（榮日陰の蔓）「おゐみやのしきちぞいとゞさゝえぬるやへのくみげきつくりゝさねて

やへぐも（源橋姫）廿八「そねの八重ぐもおもひやるへざて多く哀なるは（古）離別貫之「しらくものやへはゝさおるそちはてもおもいん人はこゝろへざつか

補 やへ〳〵（後拾）雜三公任「おしなべてさくしらぎくゝ八重〳〵れ花のしもとぞ見えたりける

補 やへぶき（後拾）戀二和泉式部「つのくはのこやとも人をいふべきはひまこそおれあしのやへぶき（相模集）「やへぶれのひまざはあらばあしのやのおとせぬ風ゝあらゝとぞおもふ（拾玉）六「つのくはの池れあしまは引ゝへて今日のあやめや小屋の八重ぶき

補 やへさゝき（新續古）神祇俊光「千もやぶる神のゝむろのやへ榊と祀もの陰も君のゝやゝん

補 やへぎく（千載）賀花園左大臣「やへぎくのはゝひはしるし君ゞ世ゝちとせの秋を重ぬべしとい（後拾）釋教弁乳母「八重菊は蓮の露をおきそへて九品までうつろもしつる

やへひげき（新古）六知家「とし月はしゞるむくらのやへひげれもとゝまばらはおもひしりども

補 やへそげき（散木）「心あひの風はれめりせ八重をげきひまおきをちは立やすらふと

やど 宿（狹）四下五十三大やけはあらせさまひてい中々ゝやうはさびしきやどを覺しやらん事いのさくこそもべれと（源玉鬘）十九「やどちかく梅のいおうゐゞあぢきおくまつ人のゝはあやまされけり（同）同「いろよりもゝこそあもれはおもゐゆれたげそでふれしやどの梅そも

やどり（源總角）卅五「とゞ〳〵き御やどりおぞもゝり給いきそのわたりいとちらきざうの人の家は（同松風）四あづゝり云しもやにぞつくろひてやどり侍るを（古）春下々そせい「むあちらそゝりせのやどりいされゝる我はをしへよゆきてうらミん補（万）九ノ十二「春草を馬咋山ゆこえくある鴈のつゝひい宿過奈利（ヤドリスクナリ）（同）十四十七「あづまぢの手兒れよびさゝこえゝねてやまはゝもねもやどりいあしは

やどりとる（古）離別遍昭「夕ぐれのまげきい山とゝえあゝんよるいまえゞとやどりと

るべく

補 やどりうど（著聞）十六 我やどりうどまて侍り

やどりのつかさ（枕）八十 やどりのつかさの權の守ハ下野甲斐越後筑後阿波（職原抄私抄）舟橋清三位環翠軒云宿官（ヤトリノツカサ）トハ官ノ外記ナドノ五位シタルガヤガテ顯職ニ任ジガタキヲ外國等ニシバシ任ズコレハ官ヲヤドス義ナリ

補 やどり木（續古）二 戀行家「いつかわれかりそめまさまやどり木のねも見ぬものをうき名さつらん

やどる 次（源手習）三 僧都ゐり給へりけれバ一二日やどらんといひまやり給へりけれバ云々物まうでの人ハつねまぞやどり給といへバ（白文）十二ノ十三 次馬嵬亭（ノダヒヤニ）（後）春下 よみ人しらす「我やどまをそれのむかのおほりれバきやどる人やあるとまつりか（空穗 後蔭）五十三 抑けだものといへど虎狼ならぬハすまざゐり云々何の御心まていとけあきやどまハやどり給ふぞ（万）三ノ十九「いづこまり吾やどりせん高島のりちのゝ原ま此日くれなバ（古）春上 貫之 むつせまうつるでとまやどりける人の家ま久しくやどらでは どへて後まいたれりけれバりの家のあるドかくさざりまおんやどりハあるといひ出ゝて侍りけれバ（源帚木）廿二 月さまやどるをそりをそぎんもさをゲにて（同 若紫）

廿八 くらぶの山まやどりもとらまほしゝ夕あれど 補（伊勢物）八十六段 やどりのりたをそやるまの いさり火おそくそゆるま

やどをとる（宇治拾）九一 信濃國ひくらといふ所まやどりぬ郡のつりさまやどをとれり

やどりる（源蜻蛉）五十四 「やどりさバ一夜ハねおん大りたの花まうつらぬおゝろなりとも（古）春上 よみ人しらす「をりとらバをしげまもあるりさくら花いざやどりてちるまでハみん（源橋姫）十三 「跡たえてまゝろすむとハおけれどもまをうち山まやどそあそりれ（同夕霧）九 道いとさど〳〵しけれバこのわたりまやどり侍る 補（万）十七四十八 「めひの野のすゝきおーなべふるゆきま宿りるけふーりおーくおもゆ（新古）秋上 通具「秋のよハやどりる月も露おゲら袖まふきこす荻のうは風（同）同 家長「秋の月ーのにやどりる影たけてをざゝゲ原ま露ふゑまけり 補（万）十八 卅八「やぶおその里まやどりる春雨まこもりつゝむと妹につゲつや

やどれる（源夕顔）三 十 これみつのあそんのやどれる所ままりて（同）同 おそてりくもりおきやどりハとりつるぞと

やどふ（宇治拾）四 四 父母ハうゑんといふものやどハんとてくゲまありらさまのゲ

りにけり（同）四五さるやどに父母い人々もやとひ集めて舟よのせんとてきてみるよ（續日本紀）十九十四唐乃詞遠不假須書記須博士不座須此國乃云傳方良牟乃日本乃（同）廿ノ廿四奈良暦我兵起爾被雇多利志秦等乎波（方丈記）りさいらよ舌根をやとひて不清の念佛兩三度そしてやそぬ補（兼盛集）「年そへてありつくすべき糸かれやさかべさづめをやとひてしげか（寛平歌合）「霜ゲれの枝とかるびそしら雪そ花よやとひて見れぞもありぞ

やどもり　宿守（夫）卅六二所詣下向後侍どもそえざりしりべよめる鎌倉右大臣「たびそぬきしあとのやどもりおのくよわたくしあれやけさいいまざこぬ（源手習）五ねゲらひ有べき所よおそ侍るめれといひてありつる宿守のそのこそよぶ（同夕顔）六此やどもりかるそのこをよびてとひきく（同松風）三りの時よりつたわりてやどもりのやうよてある人をよびとりてりたらふ（同寄生）六十五心をでうあらましげかる水の音のこやどもりよて人りゲもことよこえぞ

やどす（後）春上「ふくりせよちらぞもあらかんむめの花我りりでろもひとよやどさん補（同）雜四中將よて内よ侍ひける時に相しりける女藏人の曹司よつゲやかぐひおひりけをやどしおきて侍りけるを

やちくさ（古）長哥ふぢでろもおれるこゝろもやちくさのことのもでとよ（万）廿ノ十四「やちくさよくさ木をうゑてときでとよさりん花そしをつゝしぬぞね補（貫之集）「かぎりかくゲおもふ人れ行野べい色やちくさよ花ぞさきける

やりもてゝ（宇治拾）七五見ざよもりへらぞもしりいぬ男よくやりもてゝのち

やりど（同蜻蛉）卅六。小宰相ノ局ノサマチ局かどいひてせぞくほどかきやり戸口よりる給へる云々（同夕顔）十九もしぢりきおまし所かりけれべやり戸を引あれ給ひてもろともよ見出し給ふ（同浮舟）卅九此おかしまをやりどをへざてゝ所えゲそよるとり（枕）八いやしけかるものやり戸つし何もる中もものいいやしきなり（源夕顔）三さをゲよされたるやり戸ぐちよ（枕）二八やり戸かどあらくあくるもいとよくし（夫）卅一知家「こよひさへことしげしとてあふことをちゲへやりどのさてなゲらのこ

やりみづ（順集）御前のやり水ようりべるのこりのきく（源すま）廿三水ふりうやりかし植木どもなぞして（後）哀傷「なき人のりげざよみえぬやり水の底よかみゲをかゲしてそこに（源帚木）四十八やり水のめいぞくとよろこぶ（同若紫）十二やり水よのゲり火ともし

やる　破（源浮舟）六十四むつりしきそぐかどやりておとろくくく一さびよもしさゝめ

ぎ（神樂歌）さゝこけば袖おそやれめ云々（土佐日記）終とまれらくまれとくやりてん（枕）十八人のやりをてたる文をみるゝ（源幻）廿一御ふみどもやれば〜とおぼされはるゝやや云々やらせ給ひおどもるゝ（後）雜二元亘親王「やれば〜やらねば人ゝをえぬべ〜おく〜も猶ゝへにまされり（伊勢物）四十一段うへのきぬのゝゝをもりやりてけり

補（源浮舟）六十五かくのゝやらせ給ふなさけおきことゝいふ（兼輔集）女の人のもとゝ文やらむとてかきてやり〜しるをきゝて「おもふあといふことかゝゝいゝづらゝかきてやるをぞなぐさめゝもる（拾）別よみ人「わゝれぢゝこひ〜き人のふゝをれやゝらそのみこそ見まくゐ〜けれ（新拾）戀四江侍從身まゝりはる男の文をとりあつめてやりにつとて「見るまゝゝおつる涙の玉章ゝやるゝゝもおくゝゝあ〜ゝりはり

やる　遣（古）夏としし卯月まされる櫻そみてよめる「哀てふことをあまたゝやらゞとや春ゝおくれてひとりさくらん（伊勢物）初段ゝりぎぬのゝそゝきりてうゝそゝきてやる（同）二段雨そゞふるゝやりける（古）東歌「わゞせこをみやこゝやりてゝゐゞまのまゞきのゝまれまつぞこひゝき（源若紫）四十一をゝ〜きゐなどそやりたまふ（貫之集）下ノ廿七四月ゝ同ゝ人れもとゝやる「あむぬまゝ梅もさくらも過ぬるをうの花をさへやりつべきゝゝか補（兼盛集）藤の花を人をる「引よせてまづこそ手をれ藤のむなまゞ見ぬ人ゝ見せゝやるとて

やる（六）九、一（貫之集）「みゝ人の老をゝすするといふきくゐもゝとせをやる花ゝぞ有ける

やるゝゝさゝ〜（源紅葉賀）十七むねのやるゝゝさゝきを（新拾）戀四江侍從「みるまゝにおつるなゝどのゝまづさゝやるゝゝたもおくゝゝあ〜ゝりはり（源夕顔）廿七いふゝひおくなりぬるゝみ給ふゝやるゝゝたなくて

やをとめ（神樂哥）けふの春のやをとめ云々（能宣集）二（拾）長歌よみ人〜らす今ゝともいたゞ〜ゝどやをとめのたつや春日のふるゝとゝ云々補（大納言師氏卿集）「やをとめもけふやひとへの夏衣神のゝそぎぞいそぎたつらん（万代）神祇能宣「八處女も霞ともゝはふ〜こそ春日の野べゝ立わたるらめ（拾）神樂忠房「めづら〜きはふの春日のやをとめゝ神もうれ〜とおのむざらめや（土御門内大臣通親公の嚴島御幸の記）御神樂のやをとめ八人とゝえゝり

やをら（枕）六、五方弘豆ひとゝもりをとりて小さうゞのう〜ろゝてやをらくひければ引あらい〜て笑いるゝ事ぞゝりぎりおきや（源橋姫）七姫君御硯をやをら引よせて（同

空蟬）八やをらおきいでゝそゞーあるひとへひとつをぬてをべり出まゐり（同箒木）
卅八あれやと御心とゞめてやそらおきてたちぎゝさまへば（同末摘）十八やをらおー
あれて入給ひにけり（空穗國讓）中、五十九大將ゑもーよりやをらの御りてゑをのもさま
まゐもりて穴をもとめさまへど云々（蜻蛉日記）下、中つゝまーき人のけぢらく覺ゆれ
ばやをらゝくれてふーてきけば云々（同）中、上やをらゝさちもーりてーするゝる鷹をき
りもおちつ（枕）四、二。男ノ局ヲタ冬ハ火桶ヨやそらゝつる火箸の音も忍びたれど聞
ゆるをいとゞさゝきまさり聲ヨてもいふヨ（空穗藏開）中、四ゑそらよおいーまーて
らいまゝそー給へば云々おろそらまいおもいぬなめりつとめて文やるいとゑた
まひてやをら入らせ給ひて（同國讓）下ノ廿五御あとのゝたよりーのびてまうでゝ申せ
云々聞えんとて御あとのゝたよりやそらをべりいるを補（大和物）くれぬをばやを
らすべりいりて此人をおくまもいれぎ

やゝ（源東や）六十殿ゐ人のあやーき聲ーさる夜行うちーてやゝの辰巳のすみのくづ
れいとあやふー此人の御車いるべくいひきいれてゑとさーてよ。（細）家ナリ

やゝゑ（古）大歌所「水ぐきのそゝのやゝたまいもとあれとねてのあさげの霜のふり
いも

○たびやゝた（夫）卅五「うゝれめのうゝれてあるくさびやゝさをゑつきゞたきもの
まぞありける（拾玉）四、四十「あめもれぬさびのやゝたまヨ日ゝをへてゑやこゝひーき
浮ぐもの空補（榮歌合）十六左のゝさの人々いろ〳〵のうゑものをやゝたまもりてか
ねのとこなつのもなをーたる舟ふたつまのりて
○ふなやゝた（土佐日記）上、十七舟やゝたの塵もちり空行雲もたゞよひぬとぞ云ゐる

補やゝつゝゑ宅神（三金）四月神祭のこゝろをよめる永成法師「やゝつゝゑまつれ
るやどのーるーまいゐられひろものやひらでぞちる。近藤芳樹云神祇令ヨ季夏月
次祭の義解ヨ即如庶人宅神祭也とある宅神を貴嶺問答ヨヤカツカミと訓り土御門
院御集ヨ「かーた木のもりのーさぞゝりーきてやゝつみ神を祭る頃哉とよま
せたまへる宅神ハ即竈神ヨて家毎ヨある竈處の事ゐり木工權頭爲忠朝臣家百首ヨ
神祭を親隆「おゝゝーいそのやひらでそゝをりつゝやどのへつひまをおへつるゝ
なとある神祭も家神祭ゐることやどのへつひとあるまて知べー忠見集ヨ四月家の
神まつる「年をとままつらんゝぞいきねぞ見むいさゞくかゑのーらくるまでまと
ある家神も宅神ヨおなゝその證ハ明月記の建久十年四月卅日の件ヨ今夜家神祭中
略件竈神日來座坊門去廿七日渡此宿所坤方了と見えたるまて宅神ハ竈神ゐることと

明らゝ也拾芥抄ニ祭宅神吉日とて日をび載されど月をい記されぎされどこのく忠見集明月記等の所見四月なれば此月ニ祭るニやあらん爲忠朝臣家百首ニ或い卯花をよとあもせ或いまつる卯月といふ歌を載さるおとを參考ーておもふべー

やゝら　族（空穗祭使）卅一父母にちやからひとさびにほろびていりりなくたよりおきぎ學生云々　補（万）九ノ卅六親族（ヤカラ）ぞもいよりつぞひて

○ぬをびとのやゝら　罵リテ（イフ）（空穗藏開）中卅九。大將ノ參内ヲ見ル人々ノ從者ノ罵ル詞　わゞきをを已びさせ奉る盗人のやゝらいあたのたいふれニさもふれてとをうのをきやう文さゝげもちてまどひくるぞとあつまりて

やゝん　野干（水鏡）上欽明。狐女ニ化テ妻トナリ形チアラハシタルコトイフ所ニ　やゝんをきつねと申侍りーい事のおこりい云々され汝をわするべゝらぎ常にきてねよといひーゝび其後きさりてね侍りきさてきつねとい申そめーおり　云々

やゞて。常ト少シイヒ（サマカハレリ）（枕）五、五宮の女房を十人出させ給ふ今二人い女院ーけい舍の人やゞてもらゝらおりけり（同）十一、十一其事させんとをといいんといふをと文字をうーあひてたゞいもんぎる里へ出んぎるあどいへをやゞていとわろー（狹）二、下十六。東宮ノ使御使いやゞて宮のをけなりけり。俗語ノ則ノ如シ宣長云ソノマヽ也（空穗俊蔭）上宵夜中曉にも參りこんとおもふをこゝニやゞておいするる人ゝ親やおいをる又通ひたまふ所やある（源帚木）十三心ふゝーやなぞほめさてられてあれをゝこぬれびやゞて尼ニおりぬゝー（同桐壺）四ある時いおやとのでもりをぐーてやゞてさふらいせ給ひおど（枕）十二、五うちとくまどきものよろーき男を下司女のやめていこどうおつゝーうこそおいをおどいへばやゞて思ひおとされぬべーそーらるゝい中々よー下司ニやめらるいをる女さニわろー（空穗俊蔭）六十一。男君尋來ル所さなんと母ニゝされびやゞてうせぬる人ニてこそあらまーゝ何ーニゝーらせ奉るといへどゝひなー（同）廿八親もあり知るべき人もある身あらばゝゝる所にかりニてもひとりいありなんやゝゞて此すをゝくちぬべきより外のゆくへもおくおんん（同菊の宴）下五、十四此比い宮おとゞ御方〳〵おいーまーよるいやゞてこおさニおやとのでもれば（同藏開）中ノ卅四それゞあやーさニひと日まゝで侍りーまゝニやゞてまうでゝ侍りーニ（拾）戀三、中宮内侍「うつろふい下葉をゝりとをーやどニやゞてもの秋ニなりニけるゝおる（同）物名忠岑「ーら露のかゝるゝやゞてきえさらば草をぞ玉のくーげあらまー（六帖）五ノ下ことのを「契りおきーことのむゝいる浮世ニいふみも心もやゞてこそふれ（同）一、下いせ「秋の月ひとへニあゝぬ物なれば涙をやゞてうつーてぞみる（賴基集）廿八「涼ーさいやゞて心ニまゝせさり扇

をあふく風からをーて(元眞集)十八。もものへ行人は衣をとらすとて「別路の草をの露も
むらへとてやげてゝわゝぬあろもをぞやる(六帖)一上、「西へぞは夏のいはせばーた
ひてやゝげてあひーき秋ゝこてまー(蜻蛉日記)中下、さらば同ゝくゝ今日出させ給へ
やげて御供つゝうまつらん補(榮玉のゝさり)十三よるもこゝろうーもまゐらねばやげ
てをのこはあこゐて(新拾)戀四實繼「やげてあどむゝーがたりは成ぬらん見ーゝまぢ
ゝき夢のゝよひぢ(千載)離別顯輔「頼むれど心ゝゝりてのへりこばこれぞやげての別
なるべき(新後撰)釋教忠源「むら雲にかくるゝ月ゝ程もおくやげてさやけき光をぞ見
る(同)戀一丹後「けふこそゝ袖よもゝらせいつのまはやげて泪の色は見ゆらん(同)戀三
師重「待えてもやげて別の夕こそとふさへつらき契ありけれ(同)同重經「いゝゞせん
まつほど過て更るよはやげてなでりけそーきさゝられを(同)戀五俊光「忘らるゝあらひ
有とゝ知あげらやげてとまでゝおもゝさりーを(同)雜上國平「さくら花ちらをばやげ
てこよーのゝ山やいとたぬすこゝあらまー(玉葉)雜一淑氏「尋ねきてかへるさまよふ
み山ぢゝ花こそやげてーをりありけれ(續千)夏能清「一むらゝやげて過ぬる夕立の
なほ雲のこる空ぞ涼ーき(後拾)雜一道命法師「ものいもで人のおゝろを見るほどはやげ
てとたれでやこぬべきのな(詞花)冬匡房「山ふゝこやくをみげまのけふりおそやげ

て雪ゞの雲とありけれ(同)戀上惠法師「かくとだはいもでもゝあくおひーなばやげて
ーられぬ身とやありなん(後拾)冬爲善「みやこへゝ年とゝもにぞゝへるべきやげて
春をもむゝへがてらは(玉葉)春上院御製「のどかはもやげて成行けーき哉きのふの日
影けふの春雨(同)戀三親子「とゞめあへぞやげてこゞるゝ泪ゆゑ見せぬ心を人にこえ
ぬる(續千)釋教成運「有明ゝもと見ーそらの月ぞともーるこそやげてさとりありれ
(新後拾)雜上實簾院贈左大臣「ひとゝたはあきぬときけば里ごとはやげてかぞふ鳥の聲
ゝか(後拾)戀四西宮左大臣「日はそへてうき事のこもまさるゝおくれていやげてあけぞ
もあらなん(拾玉)四「世中を二たび三たびかげゝとてやげて涙のおそく落ぬる(拾
員)上「ーきさへのまくらのーたはこあきりてやげてもくだを泪川ゝか(源若紫)十一
ゐどおき所あれば君もやげて聞給ふ(後拾)秋上覺法師「今夜こそ鹿のねちゝくきあゆ
なれやげてかきねゝ秋の野おれば(同)哀傷實方「うさゝねの此よのゆめのたゝあきは
さめぬやげての命ともげか(月清)上「やげてさゝ心のやこのもれねゝ三十ちの
月は雲のゝゝれる(千載)戀三小侍從「見ーゆめのさめぬやげてのうつゝはてはふとは
のめーくれとまさむや(月清)上「をやまぎのきのふのさあへとりもあへぞやげて
や秋の風も立おん(今川了俊辨要抄)(布衣記)軈(ヤカテ)(太秦牛祭繪詞)軈加天(長秋詠草)日

比おもりていづる日こもりたる僧の庵室れ障子よかきつけゝる「草のいろよ心い
とめついつゝまさやげて我身もすまむとすらん（拾愚）上「風ふけばやがてもれの
くうき雲の又いづゝたよ打ゝぐるらん（千載）冬定家「ゝぐれつるまやのゝきもの
どあきにやげてさゝいる月のゝげゝあ（同）同仲頼「えねでえよあらの葉づたひおと
づれてやげてのきもにゝぐれきよれり（同）戀四讃岐「ひとよとて夜がれゝ床のさむゝ
ろにやげてもちりのつもりぬるゝあ（同）春上俊頼「煙ゝと室のやゝまを見ゝそどよや
げても空のこすをぬるゝあ（玉葉）夏、式子内親王「そとゝぎは鳴つる雲をこたえてやげ
てなげむる有明の空（同）同有忠「まぐまぐ宵とおもへばゝらむ横雲よやげてまぎるゝ短
夜月（同）秋上小侍従「稀にあふ秋のあぬゝのくれもどりあやあくやげて明ぬこの夜い
（同）同定家「荻の葉よかいりゝ風の秋の聲やげて野分のつゆくざくあり（續千）春上安藝
「鶯のあくねやゝげて告つらん霞の衣春きたりとい（同）戀一俊成「おもふよりやげて
心ぞうつりぬるこひい色あるものにぞありける（風雅）冬、宗尊親王「入ゝたの影こそや
げてゝすをけれ春よりゝれる有明の月

補 やゝせ 矢風（夫）十五好忠「とゝもゝそと秋の山べに入人れゆこの矢かせあもこぢちる
らゝ

補 やよ（新古）冬慈圓「やよゝぐれ物おもふ袖のなゝりせば木葉の後よ何をそめまゝ
やよいゝよ（源明石）廿五「おもふらん心のほどやゝよいゝよまざみぬ人のきゝゝなゝ
やまん（式子内親王集）「あげめつる遠の雲ゐもやよいゝに行へもゝらぬさこされ
のそら
やよいづゝよ（夫）卅六清輔「わゝざゝりやよいづゝたへ行よけんゝらぬ翁よ身をばゆ
づりて
やよや。契冲云やゝトよびゝけてシバシマテトイフ心也（古）夏三國の町（六帖）（小町
集）「やよやまてやまほとゝぎにことづてん我よの中よすみわびぬとよ（源明石）廿五
「いふせくも心よものを思ふゝあやよやいゝよとゝふ人もあこ 補（新千）雜上祐守「山
めぐるゝぐれよやよやことゝいんうき身世よふる道いいゝよと（玉葉）雜一良覺「これ
もこや老そのもりの時鳥やよやむゝむゝゝのことかこらあん（同）釋教顯昭「やよやまてか
こふく月よことづてんこれもよゝにいいそく心あり
やよければ。契冲云（古）十九多ノ心長歌こたくゝの老のゝぜさへやよければ身いいやゝくて
とゝこゝき事のくるゝさ
やよひ（好忠集）三月上「むゝこつむやよひの月になりぬればひらけぬらゝあわゞや

どのも〳〵

補 やぞ（賀茂保憲女集）「もりでろものやーろよゆふざもきそをりさりはてみざるらんやぞ（後）戀一中務「もりなくておおどこゝろよ成よーをおもふがをとゝおおもふらんやぞ（拾）秋人丸「年よありて一夜妹よあふ彦星もこれよまさりておおもふらんやぞ（蜻蛉日記）「世中をもりなきものとこそさゝきのうもるゝ山にあげくらんやぞ（同）「宿それがよもぎの門もさーながら有べきものとおもひはんやぞ（兼盛集）「澤水よおいぬる影を見るたづの鳴音雲ゐよきあゆらんやぞ（好忠集）「夏きぬの有ーあげらも冬のよゝせおとーねおが寒りらんやぞ（同）「よの中をうーとらいもゞのさ時もありへなんやぞ忍ふをばこそ

やそうぢびと（源葵）十二「りざーれる心あざよぞおもゆる八十氏人よなべてあふひと（後）夏「行りへる八十氏人の玉りづらりはてぞさのむあふひてふおを（採物哥）（拾）神樂歌「榊ぞのりをりぐゝーゝとめくれが八十氏人ぞまとゐせりける

やつ 奴（源手習）三、宿守詞 狐ゝさこそゝ人をおびやりせどことよもあらぬやつといふさまいとおれたり（竹取）九りくや姫てふ大盜人のやつが人を殺さんとをるありけり家のあたりたよ今ゝ通らど補（落くぼ）「御ざいをざよまゐらせでこめ奉りつるとこのやつゝよもまゐらせど（行宗集）「もちひこそいたきやつなれ皆人のふくさとのゑも名づくとおもへば

○やつぞら（竹取）八わりり弓の力ゝさつあらがふと射殺ーて首の玉ゝとりてんおそく〳〵るやつがらをまたどとの給ひて

○をやつ すの部

○やつこ 奴（父子相迎）上魔王譜代のやつあとーて（續紀）廿五十六 穢岐 奴（万）十一廿 戀の奴（方丈記）人をさのめが万他のやつことあり（安康紀）十四 妾等（同）十六 臣補（万）十八廿六

「さゞさよもかよもよこさもやつことぞあれいありをるぬーのとのぞに

補 やつたなげた（雅亮裝束抄）かゞをのたこやつたなげたなるおそきあるをおく

補 やつりを（新古）賀兼光「神代よりけふの爲とや八束穂よ長田の稻のーあひ初はん

やつりり（遊仙窟）一僕ヤツカリ。此詞延喜よりこなさよゝをさ〳〵みえぞ（神代紀）上吾是國神也

やつりひげ（古事記）上ノ十四 八拳須至于心前（神代紀）上ノ十五 生八握鬚

やつれ（忠見集）二「こゆるぎのあまゝあさりよやつれつゝいりあるときりあまめりるらん（源橋姫）十七御供ゐ人あどもあくやつれておいーをり（同玉葛）廿二 うつくーげ

なるうーろてのいといさうやつきてうづきのひとへめくもれきこめ給へる(同)十九
若ゝりーゐとをみーまふとりくろこてやつれたれをおゐくの年へさる目まゝ(同)
廿五ゝうやつれ給へるさまのおとり給ふまーくこえ給ふゝありげさうあん(或本古
今集奥書)其中こづゝらげ哥を入たる事三十首まあまれり道にふける心ふゝーと
いふともいゝでゝ集のやつれをゝへりこざるべき(源夕顔)十舟道のーこさとてを
こーくろこやつれさる旅すげさ

やつれ 衣服ナドアラヌモノヲキタルヤウナルヲニイヘリ(空穂國讓)廿上ノ二年頃さばゝり物をおゐーつゝ服まやつれーー給へれどさらぬ人まもおゐくまさりてあん(源葵)五十二ふぞゝり猶やつれさせ給へ。我奉る衣なればかくいへり(同夕顔)十五いとわりなうやつれ給ひつゝ(同)十六御さうぞくをもやつれさるかりの御ぞを奉り(同末摘)八隨身ゝらこそもゝ
ーーきあともあるべけれ云々やつれたる御ありきゝかるーーきこともいできなんと

やつれ 躰語(源葵)七かゝるやつれをそれと知られぬるげいこどうねたき事限あー(同
若菜)下五十九たゝ一言物あーまて聞えーらをばゝりゝ何をゝりれ御身のやつれまゝゝ
あらん 補(竹取)いとーのびてたゞ舎人ふさりめーつきとーてやつれ給ひて難波まゝ

おもーまーて(源若紫)三たれともしーらせ給ゝぞいといたうやつれ給へれぞ(玉葉
春下爲子)「さづねても色をそふべき身ならねばとふまつけてや花もやつれん(金葉)詞書
姿もあやーぞまやつれさりれれば

○やつるゝ(古)秋上、よみ人ーらす「君ーのぶ草まやつるゝ故郷ゝまつむーのねぞゝりあーゝ
りける(源常夏)廿四めのとれふとところまあらひさるさまもてあーいとあやーきま
やつるゝありけり 補(新古)雜中雅經「影やどを露のこーげくありもてゝ草まやつるゝ
故郷の月(玉葉)春上紫式部「うもれ木のーたまやつるゝ梅の花香をぞまちせ雲の上
まで

○やつれさこ(源匂宮)十誰もさばゝりまありぬる御あり樣のいとやつればこさゞ
ありかるやいあるべきさまーーまこれ人まさらんとつくろひ用意をべゝめるを

○やつれすげさ(源葵)四十。服ノ無紋の上の御ぞまよび色の御下げさね纓まき
給へるやつれれげさ(同末摘)七ゝやうの御やつれすげさをいゝでゝゝ御らんトつ
けん

○やつー(源夕顔)初御車もいたうやつーたまへり(同花散里)初何をゝりの御よそ
ひかく打やつーて(伊勢物)百四段むゝーことかるあとかくて尼まなりける人ありけ

りかさちをやつーされど物やゆゝしゝーゝりねんかも祭見よいでさりけると（源夕霧）四十一西のひさーをやつーて宮ゝおゝーます（同少女）十七女でをまうけさせ奉りて身にそへてもやつーゐさらぎやんでとあきよゆづれるこゝろおきて補（山家）上（新古）戀四「くまもかき折ーも人をおもひ出て心と月をやつーつるゝかな

○やつを　髮ヲ（源柏木）十三又いとあたらーう哀よりをゝり遠き御くーのおひさきをーゝやつさん事もこゝろ苦ーねれば（同玉鬘）十九馬よついつゝひゝせていをゝくーのびやつーたれどきよげゐる男どもおどもあり（同東屋）廿七。尼よあるをいふやつい給ゝんもいとをーげゐる御さまよこそおど（同）ゐゝるほどのありさまよをやつをゝ口をーきものよなんはべりねると。受領の妻よありさるを身をやつをといへり

補（後拾）春上、和泉式部「人もをぬやどよさくらをうゑたれば花もてやつす身とぞ成ぬる（玉葉）春下、關白前太政大臣「吹風のさをゝぬさきとまたるゝをとゝぎゝ花の名をやゝつさん（万代）秋上、三河内侍「秋の野の花ゐね衣都まで色ゝやつさゞ見ん人のため

やづを　屋端（夫）廿四、よみ人ーらす「みわさせばふゝぬやづまもあゝりねりよどのゝ沼よひけるあやめを

補　やつぎ（著聞）九、八、やゲておゐゞさまよ矢つぎをやよ射てけり云々矢つぎのをやきこそをーたゐけれ（同）十二、十八、いつのまよゝ矢つぎーけん云々此矢つぎのをやさよ

補　やね（万）四いさぶきのくろきのやねゝ山ちゝー

やな（源浮舟）五十八よゝらぎの右近げさまやゐ

やな　簗（貫之集）上ノ十一「やゐをれば河ゝぜいたくふくときゝ波のをゐさへおちまさりけり（現存六帖）洞院攝政（夫）卅三「早川よやゐうちわたねあゞ人の心のせよゞおもひわびぬる（新六）三、知家「せきゝくる田上川のゝゞりやゐさゝまく水の落ゞわづらふ（同）爲家「をなと川ゆくせの水のくゞりやゐをるのひよりよをやさーてけり

補（万代）雜三好忠「たよゞをもやせたね川せよやゐさーてよるとーゐれゐうきねをゞねる（同）夏兼覺「瀧川やゝゐゝゲーねり小夜ふねてくゞさに鵜舟の手縄をたねゐ

○やゐゞあり（六帖）ゐゆ「君をせば物も思ゝぎ玉川のせよふねあゆのやゐゞこりーて

○やゐくづれ（堀次）「うぶねおゞく下ね時ーも瀧川やゝゐくづれーて鮎子さゞーる

○やゐせ（詞花）夏好忠「川上にゆふだちすらーをくづせくやなせのさゐを立さわぐ也（頼政集）下ノ十五「ゐみゞ川いろをゞ袖よせられけりやゐせよとまるもをぢをので

と補（續後拾）懸二行意「いたづらよあもぬうき身のあとり川やかせの波を袖よかれつゝ（万代）秋下師頼「よーの川ゝたりも見えぬ夕霧よやかせの波のおとのそぞろる

やないぢあ　柳筥（榮、初花）卅九ものゝくりぢりきたる書やあいぢこよいれてまゐれり云々（神祇式）五造備雜物部よ柳筥七合（江次第）一、五十五取柳筥進御帳東（類聚雜例）御冠入柳筥居高坏。注柳筥ハ硯短策鞠冠又追善ノ時經卷等スウル臺也柳ニテ作ル也上ノケタノ木三角ニメ重半ノ儀アリ三光院殿ノ説ニ吉事ニハ半サシ追善ナドノ凶事ニハ重ヲ用ル也又スウルモノヲ竪ニスヱ横ニ居ル故實アルナリ

やなぐひ　武官ノ具（狹）一、下廿八やなぐひなどおひさるもの見もーらぬ姿どもーさるもの數ーらぢ補（宇治拾）一そこよて利仁やなぐひとりておひける（同）六ふーくろおるやなぐひ皮まきたる弓もちて

補やなぎのかど（玉葉）春上俊成「春雨ハくる人もなく跡たえぬ柳のゐどのゝきの玉をづ（新千）雜中、禪休法師「いつまでりやなぎの門の塵をうけて身をたてぬ世よおそつりへまー

補やなぎのゐみ（新千）春上龜山院「春風や柳のかゝをれづるらんみどりのまゆもみだるぢりよ

補やなみ（金槐集）「ものゝふのやなをつくろふこての上よあられさびーるなれのーの原

やらんりたなー。打捨テシマヒヤリカタキ心カ（源桐壺）五其恨まーてやらんりたなー（同夕顔）一卅くやーさもやらんりたなー

やらう　屋廊（源若紫）三きよげなるやらうなどつゞけて木立いとよーあるハ何人のもむよりとゝひ給へバ云々

やらふ（源夕霧）十五ありさでざよ出給へとやらひ聞え給ふより外のことなー（枕）八、十一。男ノ女ノモトヘ來リヲル所ニまことよ心ざーことなる人ハ門守ニもやなどあまさゝびやらハるれど猶ゐありせバ云々（大和物）二今ハりへりねとやらひれれバ（同）「ーねとてやとりもあへぢいやらハるゝいといきゞたきまゝちこそれれ（神代紀）上遂逐云々（古事記）上、十四神夜良比爾夜良比岐

○やらハせ（空穗國讓）上、五十九つゞねなどーて給ひーよ出給ハでやらハせ給ひーこそとすれがさくつらくあひおゞさぬ折おほくなん（源夕霧）八。タギリノカヘリギハ詞中空なるとざりなゐ家ぢハ見えぢきりの籬ハ立とまるべうもあらぢやらハせ給ふ補（同）十五かうとりなうやらとせ給御こゝろつりらこそハと聞え給ふ

やらぎ（源桐壺）十四えものりやらぎ（同葵）卅七聞えもやらぎ（拾）夏公忠「行やらで山ぢくらしつほとゝぎに今一聲のきゝまゝしさよ（源明石）十三二條院のあれなりしを

どの御かへりゝゝきもやり給ゝぎ（同紫合）十三まざさためやらぎ（同椎の本）廿八聞えやらんゝたもおくおほゝれゐたり（伊勢物）百七段例の男女よりはりてよそてやらす

補（とゝぎかたり）よ云（秋風抄）保季「いりやらでなほとしむ月のやそらひよほのやのあくる山のゝぞうき（新拾）春上俊成「山櫻さきやらぬ間ゝ暮あとよまたでぞ見ける

春のよの月（續千）春上兼氏「さのゝやゝまだ咲やらぬむかゆゑよ見まくほしさの山ぢくらさん。此類ゝ多くあり（草庵集）「やゝよりもちりこそやらね櫻花あらしゝ山の名のゝかりけり（同）「ちりやらぬ此ひともとよ花おくばたゞいたづらよ春やのこらむ

。此二首の類ゝ宣長さろしといへり猶古歌よも此類ある歟可考（堀後）常陸「こねつゞき花にこゝろのとまりつゝゆきもやられぬしゞの山こえ（新古）戀三讃岐「明ぬれどまざきぬ〳〵よかりやらで人の袖をもぬらしつるゝか（玉葉）秋下良教「山のゝを出やらぬより影ゝえて松のしたてるいざよひの月

やむ止（狭）二下廿二せめてあらゞふもあやしけれどいさうもあひしらひ給ゝでことでとよいひまぎらゝしてやみ給ひぬ（伊勢物）六十三ふたりの子ゝ情おくいらへてやゝぬ（宇治拾）二ノ卅三いゝとゞうたづねもとめられゐれどもその人ども聞ぎしてやゝよゐり（万）六ノ十三止ときかしにおもほゆる君（源明石）卅八哀よふゝくちぎり給へるゝたゞゝばゝりをさいもひよてもあざゝやまざらんとまでぞゝゆめれど（同末摘）十一よづゝぎ心やましくまれていやまゞの御こゝろさへそひて（宇治拾）十三七親の寶ゝひよ

隣の國へやりつる錢を龜にゝへてやみぬれゞ親いゝよもらだち給ゝん（源帚木）四十九むしんよ心づきなくてやゝおんと思ひゝゐさり（同夕顔）四十八みえ奉りてやゝおんとおもふおりゐり（神武紀）十干智豆之夜莽務（源末摘）十四御心よつゝぎゝいさてやみねゝし（同）廿一心よくゝもてなしてやみなんとおもへりしことを補（落くを）一いとあさましきよゝ涙も出やゝよさり

○やめ（伊勢物）六十五段いゝよせんわゞかゝる心やめ給へと佛ゝゝよも申けれどいやまさりにのゝ覺えつゝ（源榊）四あそびゝ皆やめて心よくきけゝひあまた聞ゆ

○やめ病ノ体（枕）十一貫之ゞ馬の煩ひけるよ此明神の病せ給ふとて哥よゝて奉りけんよやめゝまひけんいとそゝし（同）三。巫女詞何の宮の其殿の若君いゝゞうおもせしをゝいのでひゝるやうよやめ奉りしゝゝ思ふ中酒わゐひよしれあれば（六）

やむ藥愈（拾）戀一（六帖）上六「我こそやゝぬ人こふるやまひそれあふひならでゝやむ

くもりなし（源柏木）廿六御いのりなどとりわきてせさせ給ひけれどやむ藥ならねど
ゝひあきさゝざゝまん有ける

やむ雨風（允恭紀）阿梅多知夜梅牟（源明石）初　猶雨風やまぎ神ありしづまらで日
比ゝありぬ（同）六此風いまだ〳〵しやまざらましゝば補（枕）十一廿五日でろふりつる雪
のけさゝやみて風などのいたう吹つれば（玉葉）秋下爲家「秋の雨のやゝげたさむき山
風ゝかへさの雲もしぐれてぞ行

やむ疾（源玉鬘）卅四おやこのちぎりゝさえてやまぬものなり（同空蟬）十をとつひよ
りそらをやゝて（伊勢物）五段いとゝいたうまゝろやゝけり
○やゝ（源澪標）初心やゝ覺しけれど（同明石）十三やみふしさるやどゝ

やむる止（古）雜上齋院をゝへられんとしゝるをその子やゝゝければ云々（源東屋）
卅。戀ノかゝる御心をやむるゝそぎをせさせ奉らまゝしくおもはえぎゝやあらん
「ニ」

やむことをえぎ（續紀）廿二八止事不得

やむでとおき。打捨オカレズ。ノガレラ（源手習）初尼君古き願ありて初瀬ゝまう
レズトイフ必モアルカ
でゝり僧都むつましうやんでとなくおもふ弟子の阿闍梨をそへて佛經供養ぎる事
行ひゝり（同花の宴）十三。右大臣ヘマサリタマヒテつまどのゝゝを引着たまへば女房詞あゝ煩ゝし

よゝらぬ人こそやんでとおきゆゝりゝゝまち侍るなれといふ（花鳥）弘徽殿の御腹
の女一宮女三宮おどゝ皆源氏の姉妹ゝてましまゝ故也賤き人こそ親しきゆかりを
ばかこち侍れといふ女房もありと也（源東や）十ゝんドちの親のやむでとおく思ひ
おきて給へらんをこそ（同）十三おゝゝより北のゝさもゝの姫君をばいとやんでとおきも
のゝおもひゝしづき奉り給ふありけり（同葵）四人の御名もゝゝげ爲もゝきげましう
いとゝゝしきゝいとゞやんでとおく心ぐるしき筋ゝおもひ聞え給へど（同蓬生）十七
よるも塵ゲましき御丁の内もゝゝさゝらさびしくものゝおしさるゝの殿ゝゝ
めづらしき人ゝいとものさゝげしき御ありさまゝていとやむでとなくおぞされぬ
所々ゝゝわざともえおとづれ給ゝぎしてその人ゝまゞ世ゝやおゝそらんとぞゝり
おぞし出る折もあれぞたづね給ふべき御心ざしもいそげでありふるゝとしゝゝり
ぬ（後）旅詞さりげたく覺えれば二三日侍りてやんでとなる事ゝよりてまゝりた
ちければ。契冲云此やんでとおきゝゝえやむまゞき事有て出るをいへり（同）戀二遠き
所ゝまゝりける道よりやむでとなき事ゝよりて京へ人つゝはしるついでゝふみ
のむしゝ（源桐つぼ）一いとやむでとおきゝむゝゝあらぬげをぐれてときめき給ふ有
けり（後）雜二もの思ひ侍けるころやむ事あき高き所よりとゝせ給へりれば（源螢）

廿三猶かのそどりの袖をゝえ直ゝてゝげなとおもふこゝろのみぞやむでとおきふゝにゝとまりける（後）戀三云々ゝくやんでとおきをちなれば心よもあらぢまゝりぬるあど申て云々（源若紫）十三兵部卿の宮おんゝのびてゝさらひつき給へりけるそもとの北のゝさやんでとおくなどゝてやはゝらぬ事おそくてあけくれものをおもひておんくおり侍りよゝ（空穗たゝこそ）廿七御門詞そこにおやを給ふとありとふらひよものせんといひゝゝやむでとおき事よおそあれとてあゝらさまよまゝで只今ものせよといひゝまゝよおんをえぬ（同あて宮）七。アテ宮參リノ「ナ」いさゝゝゝおる事も殿のゝ給ふさびでとよ參らぬゝなきをやんでとおき事よゝもまうでざらん云々おどおもひて參りさり（同藏開）上八十七やむでとおき事ありてまゝでさまひても長ゐをのをゝ給へば（古事談）六洞昭申云此君本自無止御坐然重可貴御相已顯云（源寄生）四やんでとおゝらぬ人々をこのもゝ人よておいせんよ女ゝ心ぐるゝき事多ゝりぬべきこそいとをゝけれ（同浮舟）五やんでとおきものよおをゝして補（枕）十ノ十七とをき所ゝさらおりおおど都のうちおゞら身よやむでとおくおもふ人のおやむをきゝていゝよよゝとおをつゝおくおゞくよ

○補やむでとおゝらぬ（榮さまゝくの歡）卅一人やすからぢやむでとおゝらぬおをん

おゝらひそ心ゆゝぢおもへり（[illegible]）

やう。今イフヤウニ（源帚木）廿二此人のいふやうよひ人まつらんやとおん（同夕顔）五十一そひたりゝ女のさまも同ゞやうよてをえければ（同帚木）五まことかとをもてゆくよみおとりせぬやうゝおくおんあるべきと云々（同）七こと人のいもんやうよ心えぢおほせらるゝとて中將よくむ（同總角）七十二おもふらん所くるゝはれゝきゝぬやうよてゐ給へると（空穗國讓）下四十二弟のをやゝ四つ御ぐゝゝさをさりよて兄宮のやうおり（狹）四下卅四。文詞云々あゝれおる事おをくおどやうよて哥云々（同）四中九云々おどおゞくけゝひ此御めのとやうのものよやとを聞ゆる（源夕霧）六十二おゝらん後のうゝろみよとやうおる事の侍りゝゝゝゝ補（宇治拾）三やうぞ候らんとてうゝゝゝひのせさてまつりて候へば（同）十四たゞまゐり給へやうぞあるらんとせめはれば

やう。ノ心サ〻く（源葵）九さまことよをゝゝきやうの見物おりける

○かれやう（古）雜下風ふれゝノ左註此男河内の國よ人をあひゝりてゝよひつゝかれやうよのをおりゆきけり

○おんやう（空穗國讓）下ノ卅五此宮ゝこの御やうよてをゝゝげおりとおんうは給ゝる（同）同四十二これゝ宮の御やうよてけざゝくおゝゝ云々（枕）十一四僧都の君云々をさち

の御やうまて女房ゝまゝりありき給ふもいとをゝし　補（榮月の宴）卅八　わゞ君の御やうなるきゝにゝいまゝあひ奉りなんや

やうゝへて。さまのへてと云ふも同ゝ俗（源末摘）九　あもれ夕ありつるをまひのさまなどもやうゝへてをゝう思ひつゞけ（同）廿四　をゝうもあはれゝもやうゝへて心とまりぬべきありさまを（同）十八　いとかゝるもさまゝへて思ふ方ことゝ物ゝ給ふ人ゝやとねたくて（同夕顔）初　いゝなるものゝつどへるゝらんとやうゝゝりて覺さる（同うつ蟬）八　いぎたなきさまぞやうゝゝりて（同夕顔）十二　うちとくる心ばへなどあやゝくやうゝゝりてよゝれさる人ともおぼえねば。ヨノ常ノ人トヤウカハリテ也（同柏木）十三　只今なゞらまゝてゐのどゝゝもづゝゝきさまもやうもなれてゝそりたるをゝゝきゝはざまなりゝ

やうゝう　影向（大鏡）八　けふ此御堂ゝ影向ゝ給ふらん神明冥道さちもきこゝめせと

やうゝの日　八日（古）秋上　やうゝの日

やうゝがまゝ（盛衰）十二　不參ゝなゝゝ〳〵樣がまゝとて八條へおゝゝまゝつゝ

やうゝざい（源薄雲）六　なゞめたるやうゝざいゝゝゝらつき（同紅葉賀）廿二　此内侍つねよりもきよゞゝやうたいゝゝらつきなまめきて（落くぼ）一　君のなりもて給ゝんやうたいもみんとていゝなるさまゝておいにらんとゆゝゝければ（源螢）七　そびやゝゝふゝ給へりつるやうざいのをゝゝりつるをあゝぞおゞゝて（狹）十一　上十五　からなでゝこのふせんれうのさゝぬきゝたまへるやうざいこゝつきさゝぬきのすそまでたを〳〵とあてゝなまめゝゝうきないゝまへり（空穗　樓の上）下ノ十一　そびやゝゝなまめゝゝきのさち内侍のかみの御やうざいゝたちゝおゞえたり（同）五十一　木丁のそゞよりゝたいらゝほのすきてみえ給へるやうざい顔いとはなやゝゝようつくゝゝげに（同）上十七　五　やうざいそそやゝゝなまめゝゝうあなきよらの人やとゝえゝり（源寄生）九十四　ゝゝらつきやうざいほそやゝに（宇治拾）十一ノ一　やうざいなどもそこなりゝ

やうれ　人ヲ呼カルル詞（宇治拾）十一九　從者をよびてやうれ御前の邊ゝて見てこ云々あやゝう覺えてやうれといへば此みてゝあとてやりつる男ゝみて出來て　補（著聞）十六廿一　主人の武士やうれ〳〵なんえん堂の奇人ゝ物もきてとゞるくるゝゝらぬ事

やうな　益無（源手習）四　狐の變化ゝたるゝゝくゝ見あらゝさんとてひとりゝ今少ゝあゆゝよる今ひとりゝあなやうなよゝらぬものならんといひてさやうの物ゝぞくべきいんつくりつゝさすゞゝ猶まもる

やうなおれとよ　人ヲシテナサ（宇治拾）三　五舍人二人居て人なゝいれそと候とて立むゝひたり

けれいやうおれとよめされて參るぞといひければ

やうおき（益無キ（空穂祭の使）廿九さうぞくそーぎさをつゝふ事のいみどうゝたち身のさへのすぐれさるぞやうおきや（大和物）四。アシナカフ所さりけれいやうおき物ゝひ給ふといおもひけれどーうのゝ給ふ事おれいよびてゝむを

やうのもの。同ジヤウノモノ也（狹）一下。今姫君ノ形ゝのせうとのゝこちれる故にや少將ゝぞいとよく似さりれる云々やうの物と兄ノ心似テあやーの心いへやと我おゝら心づきおーあやーうやうのものと神うらめーうおやさるゝ（同匂宮）三おとゞ（源榊）卅二。齋宮ト齋院トも何ゝい大姫ハ御門ニおりやうのものとさのさうるゝーういとおづめ給へど（同其次ヲ匂宮ヘトハ総角）廿四ゝさのさやうのものと過ーー給ゝんも明くるゝ月日ゝそへても御おとをのをこそあたらーう心ぐるーうゝおーきものゝおおもひ聞めるを（同）六十四さもこそゝうき身どもゝてさるべき人々にもおくれ奉らめやうのものと人さらへなる事をそふる有さまゝてなき御ゝげをさへおやまー奉らんがいさーさ（同手習）六十三あやーくやうのものとかーこゝてーもうせ給ひれることと（同東や）廿六いさややうのものとひとさらいれおるこゝちせまーも中々ゝやあらまー（同夕霧）五十四こゝゝおく世をもてたるゝ三宮のおおトこと身をやつーー給へる云々ゝおらぎやうのものとあらそひ給ゝんもうゝてあるべー補（狹）四下宮の女御后ゝおーー聞えさせ給ひて御らんぎるゝゝさのさ心ふゝき御心といひなゞらもやうの物といゝでゝーづみいらせたまゝん（源寄生）十八ちらゝらやうのものゝあらまーやうゝをーへおぐさめ聞え給ふ

やうのひと（空穂國讓）下十六此君の御かたちいいかゞおもをるぞ内の御方のやうの人いとをかーげおるゝおん大將詞見奉らざらん人い知りがたくぞ（同）同それい宮の御やうの人のわかくきよらゝおいをるでと御かたゞーいときよらゝおいーます（源澪標）廿四惟光やうの人ゝ心の内ゝ神の御とくを哀ゝめでさーと思ふ

やうゝ（源帚木）廿七今やうゝわをれゆくきいゝかれたたえーもおもひもおれぎ（蜻蛉日記）中上祭いらへおどいふゝざこと〳〵ーうゝあらでやうゝなどーつ（源若菜）上九十九やうゝくれのゝるゝ風ふゝぎかーこき日おりと興ーて（同総角）五十一山のもの光りやうゝゝゆるゝ（後）戀四平兼與がやうゝゝのれがさゝおりゝけれがつゝいーれる（伊勢物）百廿三段深草ゝをみれる女をやうゝあきがさゝやおもひけんかるうたをよみけり（同）十六とーでろあひおれさるめやうゝとこむおれて終ゝ尼ゝおりて（源桐壺）十ゑをーい夢かとのみさどられーをやうゝおもひーづまるゝーもさむべきかさおくさへがさきい（伊勢物）六段やうゝ夜もあれゆくゝ（源

空蟬）八いきたかきさまなどぞあやしくやうかいりてやう〳〵見あらハし給ひてあさましく心やましけれど云々やう〳〵めざめていと覺えぬあさましきはあきれたるけしきにて（宇治拾）七ノ十九日くれて事やう〳〵もてがたはなるは（同）七ノ十六又ありつる男もぞくるなどあやふく覺えければやう〳〵かくれのかたは引入りて時うつるまでやをめて（伊勢物）九十六段女をとのくいふあと月日へはけりいもきはあらねど心ぐるしとやおもひねんやう〳〵あいれとおもひけり（宇治拾）十六やう〳〵あれんとする時（同）十ノ十七六位ながら世の覺えやう〳〵聞え（源若紫）四九十御心はつくべきことゞもをしく給ふやう〳〵おきゐてを給ふ（枕）一春ハ曙やう〳〵白くなりゆく（宇治拾）十三ノ卅二もゝめハ安く通りつる穴牙のふとくなりてせをく覺えてやう〳〵としてて穴の口迄ハ出たれども（源手習）四十六物思ひしりて後ハ例の人さまならで後の世をぞはと思ふ心深く侍りしをなくなるべき程のやう〳〵ちりうなり侍るはや心ちのいとよわくのとあり侍るを（同桐壺）二やう〳〵あめの下はも人のもてなやをぐさはなりて（空穂藏開）中ノ卅八池面白く木たち興ありやう〳〵おがれもてゆく補（著聞）九約束のまへにやう〳〵の物共とらをいふはしをがひてとりつ（宇治拾）一大りさやう〳〵さまゞ〳〵なるものども云々。廣足云コハさまゞ〳〵ト同意ニツカヘリ

○やう〳〵をう〳〵。人ヲ呼也（宇治拾）九ノ十六人のつまハくものありやう〳〵をう〳〵といひて

やうやく（白文）十二ノ三黄昏慘々天微雪（同）十二ノ四月夜徐行石橋上（神樂哥）こちのくれあゞちのを弓我ひかハやうやくよりこしのびゝはは

やうことなき（源匂宮）十二其比よき娘おいをるやうでとなき所々ハ心ときめきは聞えでちなぞし給ふもあれば（空穂嵯峨の院）上一の上はていそこはこそ物し給へ又つぎ〳〵のくやうでとなくものし給ふを

やうある（源帚木）十五まはとはうるハしき人のてうぞのりざりとをるさざまれるやうある物をなんなくし出るなん云々（宇治拾）二四これハたゞ事にあらをやうあるべきとて

やうあらん（源をとめ）廿のくおきて聞えさまふやうあらんとハ思給へながら（空穂藏開）下ノ四十三さこそすてらるめれさるをそつゝおゝちの人の聖はとりたまふもやうあらん（源梅かえ）三中はもりうこの御をこどものやうつゞのをげたひとりの心ばへもめなれぬさまはいまめりしう

やうき 樣器（枕）八ノ十一村上の御時雪のいとたりうふりたりけるをやうきはもらせ給

ひて梅の花をさして（源寄生八十六）あろがねのやうきるりの御さゝづきへいどゝこんるりあり（空穗藏開上ノ卅三）御つくゑあるやうきをとりゝへてゝれゝゝくゝ給へば人々例あらぎぎおどをさめられぬるとさゝぎわらふ若宮やうきゝ人々御つぎいれさせ給ふおゞゝやと聞え給へどいゝ〳〵とてこゞさで參り給ふ。ヤトリキノ注河海或藥器親行說眞淵匂宮ノ注公ヨリ物ノ本樣ヲ出ノソレガヤウニ作ラセラルヽヲ樣器トイフソレニヨリテ同ジヤウニ奉ルトイフ語也。ヤトリキノ注細流盤ノ了ナリスヱモノ也孟津銀ノ揚器ナリ

やうめい（空穗祭の使）卅一左の大將殿もかゞりの聟ゝえとり給ゝドゝゝやうめいざえいありがたゝやなどとれゝれ打わらふを

やうめいのそけ揚名介（源夕顏）六やうめいの介なる人の家ゝおん侍りける男ゝゐあゝゝまゝりて（源語秘決抄）李部王記曰天曆四年九月五日一分除目令一勞書生讓件揚名書生云々（政事要畧）卷六十七云問人僕從不可着履但諸國揚名椽目等爲車馬從之日依例僕從猶可制哉答云々（薩戒記）揚名介事自院以葉室中納言被尋下云揚名介先例任國幷請文等可注進者此事迷惑凡任國者山城上野上総常陸近江等之由見抄物云々或昔人物語云圓明寺關白見物賀茂祭之時山城介渡申人々稱之圓明寺殿被仰云揚名介渡ルヤト被仰人々聞之云々安藤爲章云加茂祭揚名介ハ山城介ゝ限ル源氏物語のいづれの國と定めがゝ〳〵以上年山紀聞（孝經）開宗明義章立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也おの文字也大學寮より出て官ゝ任〳〵たる人といふゝや李部王記揚名書生

やうどかけたる（空穗櫻の上）上一七尺余り御ぐゝのやうどかけたるやうなるいみどうめでたう見ゆ（同藏開）中ノ二四十八うゝろむきたまへるみぐゝのやうど掛さる如くゝて（同）上一ノ十御ぐゝいやうどかれさるでとゝてひまなくゆりのゝりてさまひゝるやうゝまえたまふ（同）同十九御くゝ御もとゝ少〳〵足らぬゐどゝてやうどゝけさるでとゝてゝろき御ぞゝひまあくゆりかれられたり（同）上十八五御ぐゝをくりいでゝ云々やうどかけさるでとゝて筋もええぞひまもあくゆりかれられたり（同）上十八五御ぐゝをくりいでゝ云々やうぐゝゝ云々四尺の御づゝよりおほく打もへてやうどゝけたりと見ゆ。髮也ユリカカリミガキヲカケタル如クナルヲイフ裝束抄ニ瑩字ヲ用ヰタリ

○えうせる瑩（空穗あて宮）五御ぐゝのうるゝゝくをゝゝげゝきよらあるくろ紫のきぬをえうせるでとおひたるこのぎり末迄いたらぬ筋あゝ

やうゝさり（空穗藏開）中四十九ゝべゝろゝゝ白きあやそうちやうゝたり

やうどさる（枕）五、五節所ノ。赤組いとどうむすびさげていみどくやうどさるしろきぬは樫木のかた畫はりきさる織物のうらぎぬの上はきたるい誠はめづらしき中は（榮玉のおさり）九あをく裏やうどたるきぬはうまきて四人づゝもちたてまつりさり

やく（空穗藏開）中ノ。廿八。大將詞いとぐうらきやくをおん云々つうろうまつりつるいいとこそかたう侍つれ（同國讓）下、三おどて君のきんいひき給いで人をびよびもてきてすぎろ物語のやくいいでとー頃おもひつる事をいむん人もおうりつる（落くを）一かむりのことをたは物うはは給ふいなはやくはせんとておらんとせめ給へば（源葵）卅一殿上人どものおのまーきおどい朝夕の露わけありくをそのおろのやくはなんするおと聞給ひて（同常夏）廿一はつういーうらぬやくおゝり

やくはて（狹）大臣帝ヘノ。大將苔。いとひげ〳〵くあやーき心ざまはのゝ侍れば私ドモ内〳〵はも思ひ給へおゞくをやくはておん（源すま）廿七「ーをたるゝことをやくは松ーまはとーふるあまもおゞきをぞつむ

○やくと（枕）七、齊信ノ。清詞上の御前などはてやくと參りてをめ聞ゆるおいうで四。云々ノ。句只覺せうーワレかたいらいたく心の鬼いできていひはくゝ侍りおんものをといへゞ（宇治拾）十、八あつまの人の狩といふことをのゝやくとーてるのーゝと云ものの腹たちおうりたるいいとおそろーき物おりそれをぞは何ともおもひたらぎこゝろはまうせて殺ーとりくふことをやくとをるものゝいゝどう身の力つよく心さけく（宇治拾）七、九水飯をやくとめすともこの定はめさび御ふとりおはるべきはあらぎとて（後拾）春上、和泉式部「秋まぞのいのちもーらぎもるのゝは萩の古枝をやくときくかな（同）戀四相撲「やくとのゝ枕のーさはーをされてけふりさえせぬとこのうら哉（新千）雜中紫式部「よものうみはーはくむあまのこゝろらやくといかゝるおげれをやつむ（新拾）戀二和泉式部「よさのうみのあまのーさとみーものをさもさげやくとーをざるゝうを（夫）廿五「そぞのうらはたゞさがやくとおはだれて舟おゞーさるあまとこそおれ

○やくとい（源朝顏）十内住ーげくおりやくとい御文をうき給へば

○このやく（とりーのへもや）二ノ廿五あやーうおもむぎおるさまどもを身のやくとおもひーはいのちもつくるこゝちーき

やく。日ニィフ詞（神代紀）上ノ卅一早則焦之（ナケメ）

やく燒（三代實錄）十三、十七忽然燒盡多利（源橋姫）九かゝるをぞはをゝ給ふ宮やけはけりのうぎりーてやうす（古）春上「うをぞのいけふい

おやきそとりくさのつまもおもれりわれもこもれり（伊勢物）十二段むさしのゝ云々

（万）十四、十九「おもしろきのをゞおやきそふるくさまゝひくさまゞりおひゝおふるゝ

ゝ（源 蜻蛉）廿三御文をやきうしなひ給ひしをゞゝなどめをたて侍らざりけんなど

補 やくもえ。彌木榮縣居翁の説（天神壽詞）八桑枝乃立榮奉仕留倍支（春日祭詞）伊

加志夜久波叡能如久仕奉利（平野祭詞）ニモアリ

やくとし 厄年（空穗 樓の上）廿七左の大とのやくどしゝおもせりとてせられねゞ（源

薄雲）十七廿七ゝぞおゝしましける云々つゝしませ給ふべき御としなるゝ（盛衰）治承

三年二月廿二日宗盛卿大納言弁大將ヲ上表アリ今年三十三ニ成給ヒケレバ重厄ノ

慎トゾ聞エシ 補（水鏡）の序ゝ此尼ことし七十三ゝなんゝり侍る三十三を過がゝく

相人おども申あひたりしゝゞ岡寺ゝやくをてんゞゝまふとうけ給ゝりてまうでそ

めしよりつゝしみの年でとゝきさらぎのもつ午の日まゐりつるゝるしゝこそ今ま

で世ゝ侍ゞ今年つゝしむべきとしゝて參りつる云々

やくらひ 益貝（枕）七ノ十八所の衆どもついげさねどもとりてまへでとゝそゝわたし

倍從もその日ゝ御前ゝいづるぞらし公卿殿上人ゝかゝるゞ盃とりてもてゝゝや

くらひといふものをのこおどのせんざゝようたてあるゝ御前ゝ女ぞ出てとりける。

或云錦貝、益貝、蜀江の錦ゝ貝の紋あるを四角ゝきり椀飯饗膳等の下ゝしらるゝ也

それをやくらひといふ。此説ゝいゝゞあらん樓上ゝてゝれゞ貝の名あり（空穗 樓

の上）下ノ二六十四しろものゝゝやくがひをつきませぬりされゞきらゝとゝ。ヤク貝ゝ

錦貝ナリ（卅六貝の哥）トイフ物ニ錦貝ノ哥「ふゞのねのもえてやかゝむゝさしの

をやくかいのおるけふりおるらん。コレハヤク貝ヲカクシテヨメリ假字ノタガヘ

ルハ後世ノ哥ナレバナリ（新猿樂記）阿久夜玉夜久貝水精琥珀云々

やくそく 約束（宇治拾）七、五約束の僧のらりゆきて

やくあき 益無（源 浮舟）五十九そあたざまゝもあびらせ給ひて物おいたくあげらせ給

ひそやせおとろへさせ給ふもいとやくなし（同 帚木）廿七やくなきかたおもひなりけ

り（同 椎の本）十五さだりりの事ゝさまたゞられてあげきよのやゝゝきえまどゝんゞ

やくあきと（狹）三、廿六上さやうのなま公達のらけめゝてやくなしとて三河守おゝげし

ゝつゝて筑紫へ出したてゝ侍り

やうなき 前ゝ出ス

やくら 八座（後拾）序やくらのつらさゝそなもりて（八雲御抄）宰相の唐名（職原抄）

參議八人唐名八座

やゝ　聲也（榮衣の珠）廿三　やゝおゐてゝゞおゐーまさりけるを（撰集抄）一曉御殿の御戸をひらゞれてやゝと仰られければ大明神の御詫宣まことと思ひていそぎおき返りて（落くゐ）二ざうーまおいーて見給へばまたふー給へりたれゞまーうをゞーうてやゝおき給へ聞ゐべき事有てゐんまできつとの給へば（いほぬー）それより三日といふひ云々ゐたくひといふものを枕まーて丸ねまねたりやゝといへば驚きてとくいり給へと云ていれつる（源夕顔）廿九　そひふーてやゝとおどろゞー給へぞさゞひえまひえいりて（榮ゐふして）廿四　一の宮おゐーまーておとゞやゝおきよゝ馬ませんとおこー奉らせ給へばわれまゐあらぎおきあゞり給ひて（著聞）五ノ廿五　御枕またちてやゝとおどろゞーまゐらせて（同）五ノ十九　五僧正をやゝとよび申ければ（大和物）五　高き山の峯のおりくべくゐあらぬまおきてまゞてきぬやゝといへどいらへゐせでまゞて家まきて思ひをるま（枕）三ノ八　たゞ沓まゞあらんえーらぎと殿ゐりづゞさ人々のいひけるを方弘詞やゝ方弘ゞきたおきゐものぞや句とりまきてゐいとさゞゞー（源帚木）四ノ十　やゝとのさまふまゐ（宇治拾）五ノ十二　家ぬーのいふやう詞やゝこゝのてゝの其ゞゞよりおのれゐ老（生カ）さちたるものぞゞー（長門平家物）六　やゝ物申べきまあり（空穗菊の宴）下ノ廿七。メノト若君ニ向ヒテきんざちのおゐーませばこそ行先をたのゞ聞えてこゝゞらの人さふらへおゐーまさぎばやゝよりもトめて何をたのみてゞつゞうまつらんとこそおゐさめ

補（著聞）十二ノ廿一　門のかたへもーりいでゝやゝとよびゞへーて（宇治拾）十五ノ九　此海賊どゐ見てやゝまれゐうちある矢まゐあらざりけり

やゝ　ソロ〳〵（枕）七ノ十一。ノ所ナヴ　〳〵右の人をこまおゐひて打わらひてやゝ更まーらぎと口引たれてさるゞうーゞくるま數させ〳〵とてさゝせつ（同）二ノ廿五。八講ノ刧座果シ時　權中納言やゝまゞりぬるゐよーとて打ゞらひ給へるぞめでさき（濵松）四ノ七　雪ゐやゝ過ぬらんとおゐふゐどまやう〳〵あさゝまりゆきけーきゐ少ー直りぬるやうなるゐ（源若菜）上ノ四十五　みゞうー打さゝき給ふゐひさーくのゝる事あゞりつるあらひま人々ゐそらねをーつゝやゝまたせ奉りてひきあけさり（同明石）卅　やゝ遠くいる所なりけり。ヨホドノ心（同鈴虫）十二月やゝさーあゞりふけぬる空面白きま（伊勢物）四、つ四　れ〳〵といと物ゞゐーくておゐーけれゞやゝひさーくさふらひて古の事など思出聞えけり（兼輔集）九　「斧のえゐくちやーぬらん逢事のやゝふる事ゐひさーとおゐへゞ（六帖）六上　「秋風のやゝふくのべのーのゐゝきほま出ぬこひゐくるーゞりけり（朝忠集）卅三　「ゞさぬれどうすき衣のやゝなれゞそむてふいろのゞぎゐものゞゐ（六帖）六上　「秋かぜのやゝ吹ーけゞ山さむゐわびーき聲まむーぞおくゐる（拾）秋　惠慶

「狭れ」もやゝ打そよぐほどあるはなどかりがねの音おろるらん（伊勢物）上末ミ十九
お月のつでもりいとあつき比ほひよひいあそびをりて夜ふけてやゝそゞーき風
ふきけり（源桐壺）十一やゝさめらひておろせでとつたへ聞ゆ（新古）秋下太上天皇「秋ふ
ゝぬおけや霜夜のきり〳〵にやゝの夕寒し蓬生の月 補（風雅）夏経親「あふちさく梢
ゝ雨いやゝもれて軒のあやめゝのとる玉水

補 やゝとも（和泉式部集）上「おゝのためおれるわが身といひがほゝやゝともゝの
のおゞりーきりあ

やゝまーき。心ヤマシ（源浮舟）十二あやしーきさまのやつれ姿ーて御馬ゝておいそる
こゝちも物おそろーうやゝまーけれどものゝゆりーきかたいそゝたる御こゝろ
おれば（濱松）三ノ十九いミトくねむたげあるけたひゝてワレ入るゝもやゝまーういと
そーけれど（源御法）十九いとりくをさめんりおき心まどひゝてい願いん道ゝも入
がたくやとやゝまーきを此思ひすこーおのめゝそれさせ給へとあミだ佛を念ド
奉り給ふ（狭）三下十一上のよろつにつくろひつゝのせ奉り給ふゝも猶やゝまーゞにお
ゞーめーてとみゝもえ奉りやらぬを。（細）心ヤマシキナリ（孟）シンキ。千蔭云彌
病シキニヤ（榮疑ひ）三此京極殿の東ゝ御堂たてゝそこにおいーまさんとのミおゞ

されつるをおさミ怠らせ給へらば限りおき御有さまにておそいそぐさせ給いめさ
れどいかゞとのみおさーきうときやゝまーけゝ思ひ申たるもおとわりゝみえさせ
たまふ（源小蝶）十五見どおろあるふゞきりおゝとミゝもうちおきたまもぞろう何
やりやと聞ゆるをもおゞを所やあらんとやゝまーきそかのおとゞゝおられたて
まつりたまもんことをいりゞとおもひめぐらー侍る 補（源浮舟）十二あやーきさまの
やつれそゞさーて御馬にておもするこゝちものおそろーくやゝまーれどもの
のゆりーき方いそゝみたる御おゝろなれば山ふりうおるまゝゝいつーりいりおら
んみあいそることもおくて（とりのへもや）一いりゞあらんといとつゝまーうやゝ
まーければ

やゝひさー（蜻蛉日記）下中内ゝおとおうてやゝ久ーれれば云々（源玉葛）十一哥よまゝ
そーりれれやゝひさーう思ひめぐらーて（神代紀）下良久有一美人云々（伊勢
物）八十三段やゝひさーくさふらひていゝーへの事おゞ思ひ出聞えけり

やゝもせば（源御法）十二「やゝもせばきえをあらそふ露のよゝおくれさきたつそど
へぞもげお（狭）上ノ四十二。三母代今姫ヲ叱ル額髪そりきあゞてゝらミのゝる顔けーきやゝも
せばくひりきぬべー（同）下ノ大將三とーでろ万ゝ有げたく思ひ忍びまぎらいーつる

心中もやゝもせゞ我身も人の御身もいかゞあらんとそたれまさりて（空穂 樓の上）上、七十九「やゝもせゞ枝さゝまさるこのもとは只やどり木とおもふべからりを 補（伊勢物）イ本「やゝもせゞ風はゝたゞふ雨の音をさえぬ心はかけぞもあらあん（紫日記）やゝもせゞこゝもなれぬゞりをれゝりさる歌をよゝいで

やゝもをれば（枕）一ノ十五つとめていやみはたれど猶くもりてやゝもをれゞふりおちぬべくゝえたるもをゝ（源 若菜）下ノ十三尼きゝもやゝもをれゞさへぬよろこびのあみだともをれゞおちつゝ（空穂 樓の上）下ノ廿八はゝづゝかる折かう覺え給ふ（源 若菜）上ノ百三衛門督いとゝたう思ひゝめりてやゝもをれゞ花の木はゝめをつけてなゞめやる

やま 山（古）離別山はゝの彴りてゝへりまうできて人々わゝれをるついでによめる幽仙法師「さゝられをゞ山のさくらはまゝせてんとめんとめゞゝ花のまはゝ（源 葵）廿五夜なゝゞりかれゞ山のゞを何くれの僧たちもえさうゞあへ給ゝゞ

やまはやゝ（源 寄生）廿物覺えぬ心はまゝせつゝ山もやゝは行まゞり（同 槇柱）廿さりとて山もやゝはひき入りつゝまゞらんとのちのよまでいをゞきあとゝあき給ふは 補（空穂 嵯峨の院）一ノ廿九此事ゆるされゞ山もやゝはまゞりておやけはもつゝうまつらゞ

補 やまかとゝぎに（万）十八ノ九「めづらゝき君ゞきまさゞなけといひゝやまかとゝぎもをかはゝきかゝぬ

やまべ 山邊（古）春上貫之山寺はまうでたりけるはよめる「やゞりゝて春の山邊はねたる夜ゝ夢のうちはも花ぞちりける

やまどり 山鳥（万）八ノ五十二あゝ引のやまどりこそゝ峯むゝひはつまとひをといへ云々（同）十一ノ四十三「おもへどもおもひもかねつあゝ引の山どりのそのおゞきこのよを（六帖）二「雲のゐる遠山どりのよそはてもありとゝきけゞをゞびつゝぞぬる（同）同「秋風のふくよるでとは山どりのひとりゝぬれゞものぞゝかゝき（源 夕霧）六十一「山どりのこゝちぞゝ給ひける（同 総角）卅九山どりのこゝちゝてあゝゝゝね給ふ例の遠山どりかてあけぬ 補（万）十一ノ四十三「あゝ引の山どりの尾のゝざりをのかゞきなゞよをひとりゝもねん（同）十四ノ廿一山どりのをろのもつをにかゞみゝゝ（續後）戀五、行念法師「山どりのもつ尾のかゞをかけてのをかゞきわゝれのかゞをおひつゝ

やまとたまゝひ（源 處女）六猶さえをもとゝゝてこそやまとゞまゝひの世はもちるゝゝかさもつよう侍らめ 補（大鏡）やまとたまゝひかどいいみゞくおもゝまゝた

る（愚管抄）四公實ハ和漢の才にとみて北野天神の蹟をもふまた知足院殿ヨハ人からやまとごゝろ〜ひのまさりて識者も實資などやうヨ思れさらばやハあらむぞる（百寮和哥）「あたら〜き書を見るヨもくらゝら〜よみ開ぬるやまとごゝろ〜ひ

やまとうた（源御幸）卅。近江君の詞やまとうたハあや〜くもつゞけ侍りおん（空穗吹上）下ノ廿五かハらけたび〜ヨありて君ざちやまと哥あそばを（同）下ノ廿八ゝらハらけとりてやまと歌よみ給へり（伊勢物）八十二段のりハねんでろヨもせで酒をのミつゝ大和哥ヨかゝれりけり補（順集）天元二年正月一條藤大納言い〜山にまうでゝ七日さふらひ給いへ人詩つくりうたよむあまさ侍りいとまのひまヨあらのうたつくりやまとうさよむ云々（源總角）六十二つくりけるふみぞものおもしろき所々うちぎ〜やまとうたもことヨつけておほられど云々（同推の本）七からのものやまとのものうさどもおそられど云々（空穗藤原の君）四十一よむひぶみのやまとうたなきハ人あおづら〜むるものあり（古）序やまとうさハ人のこゝろをさねと〜て云々からの歌ヨもかくぞあるべき。やまと歌の論石上私淑言下卷ヨくむ〜く解つくされたり又景樹古今正義、隆正ゞ歌日記おどヨもくむ〜く見えさり

やまとことのは　やまとことば（源薄雲）卅三もろこ〜ヨハ云々やまとことのはヨハ秋のあれをとりさてゝおもへる（同桐壺）十六いせ貫之ヨはせ給へるやまとことのむをもゝろこ〜のうたをもさゞ其筋をぞまくらでとヨはせさせ給ふ

やまとごゝろ（續世繼）三十八かの少納言ゝらの文をもひろく學び大和心もゝ〜こゝりけるヨや（後拾）尺教赤染衛門「さもあらばあれやまと心〜ゝ〜こくゞゝそぢヨつけてあらすむゝりぞ。細智ニ細乳ヲ兼補（赤染集）「からくヨのものゝ〜るのくさぐさをやまと心ヨともゝ〜とや見ん（同）「そゞめゝらやまとごゝろヨはせむくともそむりまでやハこのさく見ゆべき（愚管抄）三人ゞらやまとまゝろをへハわろゝりける人ゝりから才ハよくて侍れどいミゞく作られき

補　やまとめ（万）十四十九「うちびさをそやのひげせハやまとめのひざまくでとヨあをさすらすな

補　やまとしまね（万）三ノ廿五長歌日本島根乎。ユハ越ノ國角鹿津乘船時ノ歌也反哥「こ〜のうみのさゆひゞ浦を旅ヨ〜て見れバともゝ〜みやまと〜ぬびつ（同）三ノ十六あゝ〜のとよりやまと〜ま見ゆ（同）三ノ廿四「なぐハ〜きいゝみの海の沖つ波千へヨゝくりぬ山跡島根者（万）廿五十六「いざ子ともさハわざをせそ天地のかさめ〜くヨぞやまと〜まねハ（新拾）賀後醍醐院御製「よものの海をさまりぬら〜我國のやまと〜まねハ波〜づゝ

あり

補 やまとゑ（住吉物）かそびようぶよりやまと繪書さる云々

やまぢ 山路（古）雑下よしの「よのうきめみえぬ山ぢへいらんよりおもふ人こそそぞ〜あり れ（源蓬生）十世のうきときいみえぬやまぢをこそたづぬめれ（拾）春、よみ人しらす

「あ〜曳の山ぢよりちれるさくらをおきえせぬとるの雪りとぞみる

補 やまと（賴政集）「こりにる野もせよ雪のふりぬれば山とよたゝむりづらざよあ〜。廣足云鷹の鳥と鳥柴よりゆひつくる緒也りづらよてれる也

やまわけころも（古）雑上、神た い法師「清たきのせゞのしらいとくりためて山とけどろもおりてきまーを。顯注ニ山ワケ衣ハ山ブシナドノ山ヲ分行衣ヲ云ナリ万葉ニハ露ワケ衣トアリ（新續古）旅時清「こえくらをやまとれでろもさらでさよほさぬたもとよふるしぐれりあ

補（續拾）羈旅最信「露ふりき山われでろもそ〜わびぬ日影にくあきもりィまきのしと道（同）同、行圓法師「時雨ゆく山分でろもけふも又ぬれてそそべき宿やありらん（續千）雑上定成「さくら色よ山分でろもうつろひぬりつちりのゝる花のした道

やまりゝ 山の川（古）春下つぶき「山河よ風のりけたるしぐらみゝながれもあへぬ紅葉ありれり（續紀）卅一十四 山川淨所者（万）一 山川之清

河内跡御心乎

補 やまぐへり（壬二）上「引をゑよいらこの鷹の山ぐへりまぐ日ゝたりしこゝろそらなり

やまぐさつきさる 山ノカタソハナリ（千載）冬俊頼「夕まぐれ山ぐさつきて立とりの羽音よたりを合せつるりあ（万）十八「雪をおきて梅をなこひを足引の山片就て家ゐせるきゝ。山よカタヨリタルナリ

補（風雅）雑中順德院「ますらをぐ山ぐさつきてすむ庵のそともよとたを杉のまろ橋（新千）冬敎定「はしさりのをのへよすゞの聞ゆるゝ山がたつきて鳥やたつらん

やまぐつ（源須磨）十四 あやしの山ぐつめきてもてなし給ふ（同夕顔）十二 ものゝなさけしらぬ山ぐつも（同橋姫）十ゐありびさる山ぐつものゝ（拾）夏是則「山ぐつと人ゝいへども郭公まづ初聲ゝとれのゝそぞきく

補（顯輔卿集）「いつのまに身を山ぐつなしてゝ都を旅とおもふなるらん

○補 やまぐつのしづ（風雅）春上成仲「梅花よほふさりゝ山ぐつのしづれりきねもかつりしきりな

やまりづら（古）大哥所「まきもくのあかしの山の山人と人も見るりに山りづらせ

よ（夫）二寂蓮「まきもくのあをーのひがらはるくれば霞をりけて山ゐづらせり（袖中抄）山ゐづらといふ神樂をるまきのゐづらまて頭をゆふをやまゐづらといふ（綺語抄）云々今云山ノハニカヽル雲ヲ山カツラト云ハカヅラニ似タル夜ノアクルホドニタチノクガカヅラノハナルヽヤウナレバイフニコソ山カヅラスル人ノアカツキニトリノクル故トハイカヽ侍ルランタツヌヘシ補（夫）七知家「神まつるうつぎげきねの白妙よゆふとりーでヽ山ゐづらせり（拾愚）上「山ゐづらあけ行雲に郭公いづるもつねも峯わゐるあり

補やまゐらら（山陵鳥）（夫）廿七光俊「山ゐらのまもをくるもとまかくまもてあつかふい心ありけり（玉葉）雜三寂蓮「これ内も猶うらやまー山ゐらの身のそどゐくすゆふゐそのやど

補やまゐらめ（拾遺）物名「紅葉よ衣のいろいろみよけり秋のやまゐらめぐりこーまよ

やまがらす（千載）誹諧女をかたらひ侍けるをいゐまもあるまゝき事也おもひたえねといひ侍りけれゞよめる安性法師「つらーとてさていよも我山ゐらもかーらい白くかる世ありとも

やまゐくれ（源明石）十一入道のらうゞをめたる所よ海づらよも山ゐくれよも云々（同総角）六十一人の御うへいかヽる山ゐくれかれどおのづゐら聞ゆるものかれば（拾）春小貳命婦「あー引の山ゐくれかる櫻をなちりのこれりと風よーらるゐ補（好忠集）「山ゐくれ風にーられぬ花ーあらばもるい過とも折てあゐめん

やまゐげ（源橋姫）十三あのめなるきいのさるべき人のつゐひさよまれなる山ゐげよいとめづらーく待よろもび給ひて（万）十、「はるされば こゐくれおそき夕月よおゐつゐなーも山ゐゐよーて

やまかさかれる（万）四（六帖）五、人をよぶ「月よみの光にきませ足引の山ゐさかりて遠からかくよ（源橋姫）十いとゞ山ゐさなれる御をミゐよたづねまるる人もかーもちん

補やまゐひ（万）十七廿五「やまゐひよされるさくらをたゞ一目君よ見せていかをゐおもん

やまだ（山田）（允恭紀）十一あー引の揶摩娜（ヤマダ）をつくり

やまだち（著聞）十二、十二、奈良坂よて山ざち待まうけて布施物ミおうをひとりてけり云々山ざちの主領とおゐーきもの云々山ざちどもたちまちよ悪心をあらさめて（つれ〳〵）八十七段山ざちありとのヽーりければ補（著聞）十二、廿三、東國にていい山ざちをー（吉

野拾遺)云々いぬ王丸山ざちまあひて云々とのきりせ給ひて「あづさゆみひきてーさへるやまざちいいぬおふものといふまりあるらん

やまさちむな　山橘(古)戀三友則「我あひをーのびりねていあーー引の山橘の色まで出ぬべーー。眞淵云山橘ハ髪ソギノ時山管ニソフル草也今ハヤブカウジト云モノ也(万)四、四

やまさづ　(古事記)下ノ十八夜麻多豆能。此云山多豆者是今造木者也(八雲御抄)杣人也(袖中抄)コモミユ

やまたのそわど　(古事記)上ノ卅五故顯白其少名毘古那神所謂久延毘古者於今者山田之曾富騰者也(ソホドイフモノナリ)

やまさのそわづ　(後)秋上、よみ人しらす「あけくらーまもるさのさをからせつゝさもとそわつの身とぞなりぬる(古)誹諧「足引の山田のそわづおのれさへ我をわーといふうれいーきこと(夫)十二、よみ人しらす「そわづさつ山田の池い今もあわ心ふりーなうきせいあれど補(後)戀四、云々田のわとりわへるのあきけるをきゝて「足引の山田のそほつ打わびてひとりりへるの音をのこそあく(古事記傳)十二、十五

やまづと　(源榊)卅三山づとまもさせ給へりーもみぢおまへのまで御らんドくらぶれば

ことまそめまーける(万)廿元正天皇「あーー引の山ゆきーりば山人のされまえーめーー山づとぞこれ

補やまつどり　(万代)戀二仲實「やまつ鳥をろのおりをのをりゞみまかゝる心を見るやとわづま

やまづり　(撰集抄)一ーさとひ七珍の財を山づりとつめりとも苦痛やむべりらぎ

まやおり　山中(源須广)廿三心をでげおる山おりおり(古)春上「をちまちのさづきもーらぬ山中におわつりおくもよぶことどりりな

補やまなーのはな　(万代)雜一、よみ人しらす「世中をうーといひてもいづくまりりを身をばかくさむ山おーの花(同)同能因「かひげねまさきまけらーお足引の山おー岡の山なーの花(同)同康賴「おをーたまを身をかくをべきかさぞおきおど散ぬらん山おーの花

補やまる　(康資王母集)五節、云々同ー夜ふりける雪の山ゐまいつもらざりーりば「ふりけれど山ゐまを雪のつもらぬい日影さーー出ーなでりおりれり(小大君集)源宰相右兵衛督まいりまをみまめされてそのあをぎりを朝のまませめられてやまゐをりきぬるまこほりのつきされば「かぎりなくとくといそれぞ足引の山井のこづいおほぞおほれる(貫之集)「ゆふだをき千とせをかけてあーー引のやまゐの色いりい

らさりけり（伊勢大輔集）「ひらけせゝをこのすゞさいをゝらゞも山井のころもう
ちもらさねぢ（九條右大臣集）「山ゐもてをれる衣のゝひもおくれふさへ見ぬやか
ゝの爲也（拾愚）中「いとゞゝく山ゐの袖やこほるらんゝへる川風身ゝさむくゝて
補 やまのも（万）四ノ十二「山羽ゝあぢむらさゝぎぬくゐれどゐれいさぶゝゐれをゝゝ
あらねば
補 やまのものそら（拾愚）上「まちゝびぬ心づくゝの春ゞをを花のいざよふ山のも
のそら
補 やまのものつき（風雅）夏後京極「夕ゞちの風ゝわゝれてゆく雲ゝおくれてのぼる山
のもの月
補 やまのとね（兼盛集）旅人いくあひざゝぬを人あひさり「旅人いをりもむさで
もむゝゝきをもやくいまゝね山のとねゝさち
やまのかたそ（夫）廿太政大臣「あゝ引の山のかたそのいいゝ水下行もりのゝれぞを
ぢゝき
やまのゐ 山の井（六帖）二「あさゝ山かげさへをゆる山のゐのあさくい人をおもふも
のゝい（万）十二ノ六三八 あさき心を我おもいおくゝ（古）戀五よみ人ゝらす「山の井のあさき心も
おもいぬゝゝゞだゝりのみ人のをゆらん 補（興風集）「あゝ引の山井ゝこゐる水と
いへゞとくとも袖のはどぞゝらるゝ
○補 やまゐのゝみづ（拾愚）上「あゝざりゝ山井のゝをづ手ゝくめゞゝづくも月の
影ぞやどれる（新拾）戀二、冷泉前太政大臣「せきとむる山井の水のかげゝたゝ見をゞゞさもと
をゝゞらまゝやい（新後拾）戀四爲家「かきやりゝ山井のゝみづさらに又たえての後の
このげをこひつゝ（貫之集）「いもくゞる山井の水を結ひあげてゝゞげためをゝきいの
ちとゝらゝる
補 やまのまゆ（重之集）「最上川おちまふ瀧のゝらいとい山のまゆよりくるゝぞあ
りける
補 やまのゝづく（万）二ノ十三「あゝ引の山のゝづくゝ妹まつとわれゝさちぬれぬ山のゝ
づくゝ（同）同「ゝをまつと君ゞぬれねむあゝびきの山のゝづくゝならまゝものを
（金葉）戀下顯季「こひゝさを妹ゝるらめや旅ねゝて山のゝづくゝ袖ぬらすとい
やまのをそ（頼政集）上ノ廿三「夜をこめて立さる山のをそゝもあれてやゝゝの人ゝ
ゝれぬる
やまのをゐ（源若菜）上ノ八十一 をくさきよき山の末ゝてつとめ侍らんとてあん

やまおろし（元經集）「あゝ引のゝ山おろしはさげふかるふもとのさとはころもう
つ聲（源若紫）十八 懺法の聲山おろしはつきて聞えくる（同夕霧）七 水の音いとすゞ
ゞして山おろし心すごく松のひゞき木ぶのく聞えわたされおどして 補（新古）雜中慈圓
「岡のべの里のあるゞを尋ぬれゞ人ゝこゝさへぞ山おろしの風

やまぐち 山口（とりゝへしや）三ノ卅一 明くれみおれし限りおく山口おるかりし顔つき
ぞ戀しく人やりおらぞおれ〳〵く打おゞめて（源松風）十四 若ぎゝをゝ給ふもいゝ
ゞあさくゝおゞされん云々かくあそゝぞれたる人の山口ゝしるゝりけれと打ゑ
みたるゝほのなゝでゝろおきゞ。（花）物ノ初ヲ山口ト云ナリ（細）伊勢造宮ノ時モ
山口祭アリ又鷹狩ニモ先入ル所ヲ山口トイフカ（六帖）きり「秋ぎりの立まゞふ峯
の山口ゝかねてぞしるきうつろゝんとゝ（蜻蛉日記）上、下「いちゞるき山口おらゞて
こおゞら神のけしきをゝせよとぞおもふ

やまふところ（源椎の本）四 姫君たちの御有さまあたらしくかゝる山ふところはひ
きこめてゝやまぞもゞおとおゞしつゞけらる（同東や）廿五 まよおき御にくせのゞぞ
なりけれゞさる山ふところの中はもおひ出させたまひしはこそ有けれ（山家集）上、四
「梅ゞゝを山ふところは吹ためて入こん人はしめよとるゝぜ 補（齋宮女御集）見ぐ

るしのさまやれいの山ふところ云々（宇治拾）十五、廿一 一の山ふところはすゝてもろも
ろのあしきものをまねきあつめて（源蜻蛉）五十九 さるひゞりの御あたりは山のふと
ころよりいできたる人々のかたはおるゝなりゝるおそ

やまぶゝ（源玉鬘）卅 山ぶゝし侍りてあゝれなる人をおん見奉りつゝゝさりし（大和
物）一 ところ〳〵山ぶゝし給ふておこおひ給けり

やまぶし（源明石）十八 山ぶしのひゞ耳は松風を聞いざし侍るはやあらん（同手習）五十六
あれやまぶしゝかゝる日はぞねゝあゝるおるゝりしといふをきゝて我も今ゝ山ぶ
しぞゝりし（後）雜二、よみ人しらす「いづれをゝ雨とゝもわゝん山ぶしのおつるおゝざもふりは
おそふれ（同）雜一 素性法師「此ゝゆきちとせゝへてもゝてしゞげおかゝる山ぶし時はあ
ふべく（源初音）十三。だいごのあざりのゝぎぬゝいとよし山伏のゝのしろ衣はゆづり
給ひて（同若菜）上 かくつゝおき山ぶしの身に 補（源柏木）五 けはくゝ心づきなきや
まぶしどもなどもいとおほくまゐる

やまぶしでゝろ（源浮舟）廿九 ひゞりゝつといひながらこよおゝりける山ぶし心ゝお
さゝりゝ哀おる人をさておきて云々

やまでえ（源浮舟）十一 いとあしき山でえはおん侍れど

やまでもり（源夕霧）初瀬の山でもりしてさとは出ドとちりひたるをふもとちりくてさうドおろし給ふ故なりけり（同若菜上三）いまいとそむきもて山でもりしをん後のよは（同橋姫）廿一山でもりの僧ども補（空穂國讓）下廿山でもりの君をむりしいいみトうかさらひきこえしりが云々いらへ山でもりのしるべき人やいと云々

やまでら　山寺（源若紫）廿一りのやまでらの人いよろしうなりて出さまひはれり

補　やまあらし（古）長哥　よしのゝ山の山あらしも寒く日でとは（玉葉）雜三院御製「山あらしの過ぬとおもふ夕ぐれはおくれてさわぐ軒の松が枝（風雅）冬、儀子内親王「山あらしは浮ゆく雲の一とほり日影さあがら時雨ふるなり（同）同進子内親王「山あらしは木の葉ふりあふむらしぐれ晴る雲間は三ヶ月のかげ（同）雜上後伏見院「山あらしはもろくおちゆくもえぢばのとゞまらぬ世いかくこそありけれ（李花集）「これよりもよしれゝ山の山あらしいさむくあらドとおもひやりしを

補　やまある（拾）詞　山あるは雪のふりかゝりて侍けるを伊勢「あしひきの山あるにふれるしらゆきいそれる衣のこゝちこそそれ（續拾）冬、冷泉太政大臣「山あるのそこのころもで月さえて雲ゐの庭はいづるもろ人（風雅）冬爲成「山あるの袖の月ヶ〻さよふけて霜ふきゝへす加茂の川風（新千）冬爲定「そのまゝはしもふりもてゝしのぶゝあ

豐のあゝりの山あるの袖（續後撰）戀一鎌倉右大臣「我戀いもつ山あるのすり衣人こそしらねみざれてぞ思ふ（新千）冬、公宗母「ふけはれり山あるの袖は風さえて日ヶ〻の糸も露結ぶまで

やまあひ（拾）冬いせ　やまあひは雪のふりかゝりて侍けるを「あしひきの山あひはふれるしら雪いそれるころもの心ちこそそれ補（風雅）雜中、永福門院「山あひはおりしづまれるしら雲のおもしと見れば花やさえはけり

やまさと　山里（源末摘）廿七山ざとのこゝちしてものあいれあり

やまざとびと　山里人（源若紫）廿四山ざと人はひさしうおとづれ給いざりけるを（同少女）五十おゞつりあき山ざと人おどをもつどへすませんの御心はて（同總角）六十かの山ざと人ゝ

やまざとびたる（源橋姫）廿二山ざとびたるさゝうどゞもゝ

補　やまざくらぢる（万）八ノ十五「あしひきの山櫻花日ならべてかくさきたらばいたこひめやも（同）十七ノ廿七「あしひきのやまざくら花ひとめざはきみとし見てばあれまひめやも

補　やまさくらど（壬二）中「みゝりをるこのりをの小野は日いくれぬ山ざくら戸はや

どやうらまゝ（新勅）春下定家「名もしるしるしるねのあらしも雪とふる山ざくら戸のあけぞのゝそら（壬二）中夏も猶山櫻戸を尋來てまゝ名ゝたつる花を見るこのあ（万）十一、廿四

「あゝ引の山さくら戸をあけおきてゝゲまつ君をゝれりとゞむる

やまき　八卷（新六）紐衣笠内大臣「あひゲさきやまきの法のたかのひも結ぶちぎりゝむ

あゝりゝを（盛衰）時政「法花經の序品をゞゝもゝらぬ身のやまきゲ末をみるぞ

うれゝき

やまぎた（源薄雲）廿一夕日たかやりゝさゝて山際のこぞあらゝかるゝ補（玉葉）秋下入道前太政大臣「霧ふりみそこそえねど影うすき月のゝぞるや秋の山ぎた（枕）一、春ゝ

あれぞのやう〳〵ゝろく成行山ぎゝそこゝありて

やまめぐり（詞花）冬道雅　東山百寺をゲそけるゝ時雨ゝれゞよめる「諸ともゝ山めぐりする時雨りかふるゝりひかき身とゝゝらぞや

やまそち　山道（源若菜）廿四山そちのものがゝりをも聞えんゝ（拾）春、よみ人「そるゲそみたちわりれ行山道ゝ花こそぬさとちりまゲひけれ

やまそづ　山水（和泉式部集）下「うきよゝゝあらゝの風そゝるべゝてみゝ山水ゝ袖ゝぬらゝつ（源若紫）十八「さゝぐそゝゝそでぬらゝれる山水ゝそめる心ゝさゝぎやゝする（多武峯少將物語）「むりゝより山水ゝこそ袖ひつれ君ゲぬるらん露ゝ物りゝ（源明石）十一行ひそゝてのちのよの事をおもひにまゝつべき山水のつらゝいりめゝき堂をゝて丶（同御法）三中々山水のそみりゝでりぬべくおぞゝとゞこそるほぞに（後）戀一、よみ人ゝらす「ゆくりたもおくせられたる山水のいたまぞゝくもおもほゆるりかな

補　やまゝば（新續古）雜中義運「山里の烟の末とかびくかよたゞ山ゝそのこりたてゝ世ゝ

補　やまゝたうみ（壬二）中「霜さゆる汀の朽葉ふそゝたき山下海ゝちどりかくかり

やまゝたそづ　山下水（古）戀一、よみ人しらず「あゝ引の山下水のこゲくれてたぎつこゝろそせきぞりねつる（新古）戀一匡衡「人ゝれぞおもふこゝろゝあゝ引の山下水のわきやりへらん（古）長哥山ゝゝ水のこゲくれてゝぎつ心をゝれゝもあひりたらゝん云々

やまびと　山人（古）序ゝさゝゲおへる山人の花のりげにやすめるゲあとゝ（源蓬生）十一ゝゲ山人のありきこのみひとつを顔ゝもなたぬとみえ給ふ御そをめかどゝ（古）大哥所「まきもくのあなゝの山の山人と人もゝるりに山りづらせよ補（玉葉）雜三定家「鐘のおとを松ゝふきゝくおひ風につま木やおもき歸る山人（同）同爲相「いはちりきつま木のみちやくれぬらんのきをゝくざる山人のある（著聞）十八、云々修行ゝありき

けるゝやまうとの物をくむせたりけるを

やまびと　仙人也（拾）神樂杖「あふさゝを今朝あえくれば山人のちとせつけとてきれる杖かり」補（万）廿十「あゝびきの山行ゝゝば山人のわれゝえをめゝやまづとぞこれ」（同）同「あゝびきの山ゝゆきけむやまびとの心もゝらぎ山人やされ」

○やまびこ（源夕顔）廿六山びこのこたふるこゑいとうとまゝ云々これ人をおこさんてさゝけば山びこのことたふるいとうるさゝ（同手習）五山びこのこさふるもいとおそろゝ（盛衰）卅七、廿二山びこゝたへておびさゞゝ（古）戀一、よみ人ゝらす「うちわびてよをゝん聲ゝ山びこのこたへぬ山ゝあらゞとぞおもふ」（同）夏躬恒「をとゝぎゝこゑも聞えを山彦ゝ外ゝかくねをこたへやゝせぬ」補（伊勢集）「鶯のかくねをまねぶ山びこを友ありげをゝもとめつるゝな」（古）戀一、よみ人しらす「つれもなき人をこふとて山びこのこさへゝるまでなげきつるゝか」（曾丹集）「神奈月ゝぐるゝたびの山びこゝ紅葉を風のたむけつるゝな。廣足按此山びこゝいたゞ山神をいへるゞ如ゝ」（万）九ノ廿四「あをのよひあゝざらめやもあゝ引の山彦とよめよびさてかくも」（夫）谷光俊「よの中ゝむかゝゝき谷のひゞくをゞされ山彦とかづけそめけん」

やまひ　病（拾）戀一、よみ人しらす「我こそやみぬ人ゝふるやまひそれあふひならでいやむくもりかゝゝ」（同）哀傷云々此男やまひおもくかりゝけり貫之哥云々（新古）哀傷やまひゝりかぎりゝかりぬときゝて（神代紀）上四十療病之方

○補やまふ　病（續後拾）詞やまふゝわづらひゝるゞすゝゝおこさり侍ければ云々。廣按こゝやまひの音便（散木）「とゞりゝるさつをのゆづるうちさえてあさらぬ戀ゝやまふ頃ゝか」（夫）廿九俊頼「おく山のくきがくれかるはたつもりゝられぬ戀ゝやまふ頃ゝか。此やまふゝやむのむを延たるかるべゝ是より誤りてやまひといふ躰語をやまふといふやうゝかりゝなるべゝさらば音便ゝゝあらぎ

補やもひ（散木）「さくらゝも枝さゝゝゝゝすもゝなれば空さへゝさゝゝさゝやもひせり。詞書おされてやもひもぞゝるとてあさりの木どもきりてらゝゝせ給を見て

やまひゝをづらひ（古）哀傷やまひゝをづらひ侍りける秋心ちのたのもゝゞかくおぞえければ云々（大和物）三やまひゝいといさうわづらひてをこゝおこさりて

やまひゝかりて（詞花）雜上高内侍帥前内大臣あゝゝゝ侍ける時こひゝかゝゝみて病ゝかりてよめる（續古）哀傷天暦の御門の御事をいとゞくかゞきてやまひゝかりゝければ云々

やまひゝゝづこて（源澪標）五やまひゝゝづこてゝへゝ給ひける位を

やまひをして（竹取）十五こゝはおそるかくや姫い重き病をしたまへばえおいもまゝどきと申せば（古）哀傷俄はやまひをしていよ〳〵とありにければ（同）同女俄は病をしていとよわくなりはれる時

やまひざらしく（空穂祭の使）十二実忠も殿はさふらふなるをなどゝまりでこぬあるゝのおとゞ詞いたいる所ものしさまふとなん承いる左のおとゞ詞あやしくさもあらざりしものゝやまひざらしくなりはたるゝか補（くほのもさび）祭の使の巻はあやしくもやまひさらしくなりはさるゝあといへるい俗は病仰山といふは同し。うつゝやまひざらしくも俗云病仰山ナリ

やまひづく（宇治拾）十二、十五おきまぞひてやまひづくもりおもひこゞるゝゝゝ云々（源橋姫）卅八故權大納言世とゝもはものをおもひつゝ病づきもりなくなり給ひはし有さまを（狭）三、上三十いとゞゝるものをのゝ思ひ侍りつれゝ病のつきてつひはゝのくなりぬといふさま云々（源橋姫）四十むなしうなりさまひしさぞぎは母は侍りしいやゞて病づきてほとゝもへぞゝくれ侍りはしゝゝ（同柏木）卅四世中心ぞさゝ思ありてやまひづきぬと覺え侍りしは（同若紫）十四ものの思ひはやまひづくものと（同若菜）下、九十五猶おやましく例おらぞやまひづきてのみすぐい給ふ

やまひめ山姫（古）雑上いせ「たちぬいぬきぬきしし人もおきものを何山びめの布さらすらん補（行宗集）「いゞくりい心よわくぞおちはるおの山ひめのゑめる顔にて

やまひして（源玉鬘）六おもきやまひしてしんとそるこゝちはも（拾）哀傷病して人おゐくおくなりし年おき人をのらやぶおどはおきて侍るをこて（古）哀傷やまひしてよゝくなりはれるときよめる（後）雑二やまひしもべりてあふこの關寺はこもりて侍ける（源わゝな）上、六十八其比の右大將やまひしてゝ給ひけるを

やまもと山本（堀次）猿仲實「夕つく日さそやあらしの山本にものわびしらは猿さけぶなり

やまもり山守（万）六廿「大きこのさゝひたまふと山守はゐるといふ山はいらぞいやまゞ

やまそげ（和泉式部集）下「音きはゞ人のもの思ひやまそゞこゝろみゞはさける花ゝか

やまぞみ山住（源若紫）廿そこしおくまりさる山ぞこもせで（同若菜）上卅一ふりき御山ぞみはうつろひ給いんゐどはこそいいざしい奉らめ

補やけむた（万代）雑四行尊「人の住さとのけしきに成はけり山ぢの末の賤のやれはさ

やけもら（後）春上 兼盛王「ねふよりゝ荻のやけもらきわけて若菜つみにとさきをさそゝん

やけやまばゝ 焼山（新六）残雪 爲家「風わたるやゝ山ぢゝの下萌もまさことゆゝぢさゆるゝら雪

やゝて（増基遠江道の記）こもりておこなひゝ山寺の火ゝやけてありゝゝもあらぢ

やぶ 藪（古）雑上 今道「日の光やぶゝゝとゝりねゞ石上ふりゝゝゝさとにもあ咲にゝり 補（万代）冬 好忠「みたゝりぢゝ冬野をわくる狩人のいづれのやぶゝこまをかくさん（好忠集）「くつゝむゝゆゝ〳〵おもへあきの野のやぶのすみゝゝ長きやどゝゝ（万代）春上 師繼「霜がれの草ゝゝがらもえゝけり春の日ゝゝのやぶゝゝけねゞ（赤染集）「ゝゝゝゝもきのやぶこそこひゝけれゝゝぢりざゝゝがやどゝゝゝゝ（源 松風）三此とゝ頃らうぢる人もゝのゝたまゝぢあやゝきやぶにゝりて侍れゞ

やぶもら 藪原（皇極紀）十一もろ〳〵ゝことぞ聞ゆるゝまの野父播羅（源 蓬生）九さるやぶもらゝとゝへ給ふ人ぢ大將殿もやんでとゝくゝも思ひ聞え給ゝドゝぢゝん

ドうけびけり 補（源 蓬生）十四まゝてかうものはゝゝきさまにてやぶもらゝゝぢぐゝ給へる人をゞ

○補 やぶがくれ（万代）雑三 品親王「風をいたみ田中のくろのやぶがくれひゝげのこのさゝゝとゞゝくゝり（好忠集）「やぶがくれきゞぢのありかうかゞふとあやゝく冬の野ゝやたゝれん

やぶる（源 総角）五十 さうゞのかゝめもいとつよゝゝぢひてやぶらんぢゞつら〳〵いみゞらんとおゞゝゝされゞ（同）卅八 さうゞぢもひきやぶりつべきけゝゝきゝれゞ（同 紅葉賀）十九 うらむる人の心やぶらゞとおもひて（同 葵）廿五 ぢもくのよゝりけれどゝくゝりゝきゝ御さゝりゝれゞみゝまとやぶれゝるやうゝり（同 常夏）廿三 人のいふことやぶりたまふいでめさまゝ（万）六ノ廿九 石もてつゝきやぶり（文德實錄）七ノ十四 今本志乃破奴倍支爾 依天（源 少女）四 あゝがちゝるさまゝ御心やぶり聞えんなどゝゝゝさゞるべゝ（同 玉葛）十 心をやぶらゞと（宇治拾）十五 皇子の軍やぶれてちりゞゝゝ逃ける程ゝ

補（源 東屋）五十六 ふりきちりひぢやぶりて人のねゞひをみて給ゝんこそ

やこゑのとり 八聲の鳥（千載）戀五 雅賴「おもひゝねこゆるせきぢゝよをふゝみ八聲のとりゝ音をぞゝへつる 補（玉葉）雑二 少將内侍「名ゝたてゝ八ゝゝといへど明はつるほぢをこのぎりゝ鳥ゝなくゝり（堀太）曉 肥後「さゝ櫛のあゝつきがたゝゝりぬとや八こゑのと

りの驚らすらん

補 やさら（万）十三、長歌 卅四 杖たらに八尺のあげきあげゝども

やさけび（夫）卅六 信實 「道おそきおそのそらりのやさけびにのがれぬーらの聲ぞきこ

ゆる 補 やさけびの事貞丈雜記ゑ說あり

やさー（竹取）十。カクヤ姫詞 あまたの人のこゝろざーおろらおらざりーそむおーくおー

てーこそあれきのふけふ御門のゝ給いんことゑつらん人聞やさーといへば（源 槇柱）九 いまめらーき人をわたーてもてかーづらんかたすゑゑ人わろくてそひもの

ー給いんも人ぎゝやさーらるべー（空穗 吹上）下、九 此節會ゑたき給ふ御ものーを質に

おらん云々をものなど清ゆゑせさせよびんあきおへゑろくーたらばやさーらら

ん（同 國讓）中、五 十七 あおものくるいーや人ぎゝこそやさーけれ御方のおとゞやらやう

の事聞給ふらんと思ふこそおもてもづらーけれ（榮 ちく〳〵の別）十 八 人のおもいん

所やさーららんとおゞーたえたり 補（散木）「やさーやお苔のーとねゑちりそむる

花を衣ゑらさねてぞぬる（同）「ゆふされば芒ぞそおへーおびらーてやさーのゝ

べの風のねーきや（著聞）十 九 歌は宮の御方にていい講せられける簾中よりもいざされ

たりねるやさーらりねる事なり

○ やさーく き み（古）誹諧よみ 人ーらす 「何そーて身のいたづらゑ老ぬらんとーのおもいん

ことぞやさーき（万）五、卅 「よの中をうーとやさーとおもへぞもとびさちらねつ鳥ゑ

ーあらねば（同）同 十一 「玉ーまの此河上ゑ家いあれどきゑをやさーゑあらいさゑあ

りき。契沖云やさーきいもづらーきおり心ある人をやさーきと云い向ひてまみえ

んも心づらひせられてもづかーきおりと云心おれば こおたの心をかおたゑおづく

るおり（源 蜻蛉）八 ーのひさる事とても御心よりおおりて有ー事おらぬ親ゑておき

のちゑ聞給へりとものいとやさーきほどあらぬをありのまゝにきこえて（同 槇柱）九

今めらーき人をわたーてもてらーづらんかたをみゑ人わろくてそひものー給いん

も人聞やさーらるべー 補（山家）上 七夕 「いそぎおきて庭の小草ね露ふまむやさーき

かぞゑ人やおもふと

やさーげり（枕）三ノ 十五 ふくろゑいりさるゆゑ矢さてほおさちあどもてありくをたゞ

ぞとゝふゑついねて何ゲー殿のといひてゆくいいとよーけーきをゝやさーがりて

ーらぞともいひきゝもいれでいぬるものいいゑどうぞにくきらー

やさーたち（狹）三、上 廿二。母代 いと高ららゑ打さらひてけふのひるまい猶ぞこひ下き

おどやさーたちたる心づきなさぞたへゲたけれど

補 やき（空穂吹上）上、卅 さま〳〵のふちうまのたれやきたり

やきいし（落くぼ）二 御やき石あてさせ給いんやときこゆれば。溫石ナリ 補（大鏡）冬いもちひのいとおほきなるをぞひとつちひさきをばふさつやきてやきいしのやうに御身にあてゝもち給へり

やきがね（夫）六公實 「やきがねの色にゝほへる山ぶきにはりもしらぬ玉のいろ」か（同）花山院 「もろこしの人にそせややきがねのこがねのいろにさける山吹

補 やきやり（宇治拾）田原にうづを給ひしやきぐりゆでぐりゝ形もかたちぞ生出けり

やりう（夜行）（源うき舟）六十三 あやしき下ををのみまるらすれば夜行をぞにせぬにとよろこぶ（同東や）六十 とのゐ人のあやしき聲したる夜行うちして（枕）三ノ十四 ゆげひのすけのやりうのり衣をぞけたもいといやしげなり云々にぞおきやりうの人々ある云々

やきゑ（燒繪）（盛衰）四十三、九十四 三浦義盛十三束二伏の白箆に山鳥の尾を以て矯（ハキ）たりけるを羽本一寸ばかり置て三浦小太郎義盛と燒繪しさりけるを能引てひやうとぞあつ（今物語）檀紙にやきゑせさせけるに云々水にゝをしをいかゞやくべき（長門本平家）十六、九 畠山庄司郎等各云々大中黒の征矢の箙にゝやきゑしさるをおひたりけり

やめ ヤムノ所ヘ出ス

やそにむらひさるやうに（狹衣）一、下八 やそにくれて（源蓬）廿七 おとゞのやそにくれまどひ給へるさまをみ給ふも（同桐壺）十。更衣ノ母君 やみにくれてふしゝづを給へるゐどに草もたりくありけるきにいとゞあれたる心ちして

やそにまどふ（源椎の本）廿八。姫君八宮ノ服ノ所 やそにまどひたまへる御あたりに（後）戀六 よみ人しらす 「よの中に猶有明の月なくてやみにまどふをとゝぬつらしな

やそにふるそ。不幸ノ身チイフ（後）秋中よみ八しらす 「秋の月つねにくてるものなくばやそにふる身にまとゝらざらまし

やそがさ。いえがた也（後）雜二 男のやまひしけるを云々やそがさにとへりければ

やみのにしき（和泉式部集）上 「ちりちらぎそる人もあきやまざとのもみぢにやそのにしきなりけり（空穂祭使）十九 つりどの御らんせさせんとしつるそやみのよのにしきとのいふやうにあん

やみのよ（源澪標）十五 此御使なくばやそのよにこそくれぬべりけれ（落くぼ）三 御帶もさらにかゝる翁の身にいやそのよに侍るべければりへしまるらせんと思ひ給

ふれと補（万）七「やそのよゐくるゝきものをいつゝかとゝゲまつ月もむやもてらぬゝ

やそのうつゝ（源桐壺）十おもゝ夕ゝよそひておゲさるゝもやみのうつゝゝゝゐ猶おとりけり（古）戀三、よみ人しらす「ぬき玉のやそのうつゝゝゐさゝゝある夢ゝいくらもまさらざりけり（忠度集）「梅のむなよるゝ夢ゝもみてゝゲなやそのうつゝゝゐ匂ひばかりゝ

補　やみまさる（榮布引の瀧）廿三あゝもゲさといふことゝいできて云々六七月ゝなりていいみゝろやそまさりてのこるなくきこめ

やゝろ（古）秋下神のやゝろのあさりをまゝりける時ゝ補（万）廿ノ卅二「國々の夜之呂のかそゝよぬさまつりあゲこひすおむいもゲかおゝさ（古）誹諧さぬき「ねぎごとそさのきゝけんやゝろこそていおゲきの森となるらめ（源明石）廿一ゝのみやゝろゝまゐることおん侍る

やゝろゝ（源若菜）上、七十一寺々やゝろゝの御いのりのた數もゝらぎ

やゝむま（新勅）賀、前關白「つるの子の又やゝむこの末までもふるきためゝそゝゲよとやそん（和名）二玄孫、爾雅云、曾孫之子爲玄孫和名夜之波古補（隆信集）長哥、云々つるの子のやゝむまでもつゝへよとおもふあまりゝ

やゝを（万）十九、十二。長歌紅の八ゝをゝゝ染ておこせたる衣のそそもとゝりてぬれぬ（拾）戀五、よみ人しらす（六帖）（万代）「紅のやゝをの衣のくゝあらゞおもひそめぎぞあるべかりける（清正集）二十内の紅葉合九月二つある年「紅の八ゝほの色ゐもみぢゞの秋くむもれるとゝゝゝぞ有ける（六帖）一、下（新拾）秋下八九「紅のやゝをの雨ゐふり來らゝゝさつゝの山のいろづくれゞ（上東門院菊合）「こむらさきやゝをそめたる菊のむなうつろふ色とたれゝ見るらん（月詣）十成範「ふく風のいろのやゝをゝゝ見えつるゐ空ゝみざるゝもそぢありけり（後拾）春下、齋宮女御「紫ゝやゝを染たる藤の花いけゝむもひさゐもの

やゝほさけ八醞酒（神代紀）卅五

やゝなひ養（新勅）雜一やゝをひ侍ける娘の五月五日くす玉奉らせ侍りゐるゝかむりてよそもべりける（拾）物名、よみ人しらす「あづまゝてやゝなゐれたる人の子ゐゝたゞみてこそものゐいひけれ（方丈記）むつゝゝ心をやゝをふむりをり（竹取）十三わがたゐたちおらぶまでやゝをひ奉りたるゝゲ子を何人ゝむゝへ聞えん（仁德紀）十一彌儺水底經曾虛赴おみのをとめを多例椰始儺播務タレヤシナハム

やゝま八洲（狹）四、下三十「やゝまもる神もきゝゐんあひもみぬこひまされてふみそぎる（古）

やゝせ〜（源榊）九「やゝまもる國つみ神も心あらばあらぬわれの中をことゝはれ（古）序あまねきおほんうつくしみの波やゝまのゐりまでおよぐれ

やひらで。ひちての所可考合（賀茂保憲女集）「とゝでとゝは八十氏人のやひらでゝかゝいの木の森うゑくおるらん（神樂哥）韓神八ひらてを手ゝとりもちてわれらかみのゝらをきせんやゝらをき（大嘗會式）葉椀久菩互覆以笠形葉盤比良互似笠形。ヤヒラテハおゐくの平盤おり眞淵注補（新勅）神祇惠慶「〜もゞれやおられひろもをやひらでゝさゝとぞいそぐ神のみやつこ

やゝめ（空穗藤原の君）四十一そちのぬ〜翁やゝめゝてつきおく覺ゆれば（同）四十九ぞのやゝめのまゝまゝに所ゝゝやゝめ男ハすまゝむる心つけゝめ給ふお（同たつの群鳥）十七。書所ノこれハ源宰相とのこのやゝめゝてをのわらハつゝひてる給へり（蜻蛉日記）下。女書ノ下サマ又やゝめゝをみゝゝる男のふみゝきさゝてつちづゑつきて物思ふさまゝたる所ゝ哥云々とものゝて（源若菜）上ノ十七。柏木ノ下ヲたゝきこゝろざゝふゝくてやゝめゝをみゝて過ゝつゝ（同桐壺）十やゝめゝをおれど人ひとりの御ゝつきゝとかくつくろひたてゝめやゝをきゐどゝてをぐゝ給ひつるを（和名）釋名云無夫曰寡和名夜無女（伊勢物）百十三段昔男やゝめゝてゐて（竹取）上この翁ハゝくや姫のやゝめおるを

なげゝゝけれどよき人ゝあハせんと思ひたゝれども補（濵松）二上やゝめおれどゝもむをめおどあまゝひろき家ゝにみゝちて

やゝめゞらす（新六）一信實「又こよひやゝめがゝらすよ人をのなきをゞゝらで人我イおどろゝに（夫）廿七大輔「ゝくかりゝやゝめゞらをゝうれゝきいたゞひとりぬる有明の空補やゝめゞらにの事擁書漫筆ゝくたゝくいへり（遊仙窟）可憎病鵲ヤモメガラス

やゝめひと（源玉葛）廿九例おらをやゝめ人の引ゝゲへこまがへるやうゝもありゝゝ

やゝせがハ（夫）五隆實「やゝ川をせゝのゐるせきゝせきとめて水ひきゝくるをのゝなゝしゝろ

やゝせゝらめく（枕）三ノ廿二受領などおとおゞちたる人ハふときいとよゝあまりやゝせからめきさるハこゝろいられたらんとおゝしゝはゝらる

やゝせそこあハれ（狹）四中十三あけくれ音をのゝをきゝづみいみゞうやゝせそこおれ打とけ給へるを

補やゝせおとろへ（源槇柱）十一つねの御おやゝゝやゝせおとろへひゝづゝて（同浮舟）五十九やゝせおとろへさせ給ふもいとやくなゝ（金葉）詞書やゝせおとろへて姿もあやゝゝけゝやつれたりければ（源柏木）卅九。致仕ノ大サマヲいたうやゝせおとろへて御ひげなどもと

りつくろひ給いねどーげりて

補 やせおとろふ（濱松）二下 御かたちのいとどうやせおとろへてあらぬものまおもげいりー給ひつゝ

やせ〳〵（源少女）十二。大内記ノいとうゑひーれてそるのゐつきいとやせ〳〵なり（同総角）四十九。大君ノ心姫ぎみそれもやう〳〵さゝり過ぬる身ぞゝーかゞみをみれば やせ〳〵になりもてゆくを（源柳）五十 そこーうちあやまてやせ〳〵まなり給へるほどいとをゝーげあり（同若菜）下百一 ゆまいといたくやせ〳〵まあをまて。やすゝ所モミルベシ

やせさらぎひ（宇治拾）十二六 さけ高き僧のやせさらぎひてそるまさふとげ也 補（宇治拾）ゝゆのやうまやせさらぎひつゝかろ〳〵とやう〳〵まーて家まゆきつきぬ（散木）「山ゝげまやせさらぎへる犬ざくらおひたなされてひく人もあー

やせ（万）八廿二 つむあそくへどいやゝせまやす（源末摘）廿五 やせ給へることいとゐー ゆまやせおとろへて

○やせほそり（源御法）十一 こまあうやせほそり給へれど

補 やすゝる（源東屋）五十七 ふそいやにかるべきを人の物いひいとうさてあるものあれば

やせらぎ（源蜻蛉）四十 かく心まざらまーやいおどおぎーつゞくるもやすゝらぎ（同桐壺）初 それより下らうの更衣たちいまーてやせゝらぎ（同夕顔）四 やせゝらぎなげきわさりつるま（同若紫）十四 やせゝらぬ事おほくてあけくれものをおもひて

やせだいど（長門本平家）十四 これこそやすゝ大事あれいゝゞあるべきといひれば

やすらゝ（落くぼ）四 打さらひ給ふさまいとやすらゝあり（源帚木）卅三 ゐうそくまよりおいそいとやせらゝある御ふるまひありや（同）七 やせらゝま身そもてなーふるまひさるいとゝいらゝなりや（同総角）九十三 中納言のあさー方まをみあれて人々やすらゝによびつゝひ人もあまたーてものまるらせおどー給ふを（枕）六二 ーけいーやの畵にゝきさるやうまうつくーゞまてゐさせ給へるま宮いとやすらゝま今少ーおとおびさせ給へるけーき

やせらひ（空穗俊蔭）下 せちまそゝのゝしーるまへどとゝくやにらひてお前より給いせさるせた風の琴を胡笳の聲まーらべてひくま云々（同國讓）下廿七 せうそく申つゞぬゐどま打やせらひつゝ聞侍りーゝバ（源末摘）五 ものやいひよらまーとおゞせどうちつけまやおゞさんとこゝろはづゝしーくてやせらひ給ふ（同夕顔）十二 過ゞてまや

そらひ給へるさま（和泉式部集）「やそらひは槇のとをこそさゝざらめいかであけつる冬のよならん（蜻蛉日記）中、コモリヨリ下。帰リテ後 御かへりには文ノ詞 山のそまひは秋のけしきも見たまへんとせしはまさうき時のやすらひ（いさよひ（古））はて中空になん（も（古））（六帖）二（古）
戀四「きゝやこん我やゆかんのやそらひは槇のいさとをさゝでねはけり 補（玉葉）
雑五、よみ人しらそ「あられける身をうたがひしやそらひはおそく世をのがれなん
（風雅）戀二 隆祐「更はねる槇のいさ戸のやそらひは月あそいづれ人はつれなし（新古）
雑上 保秀「入やらて夜をゝしむ月のやそらひはほのぐ明る山のはぞうき
○補 やそらふ（新古）冬 西行「おのづからいはぬをとふ人やあるとやそらふほどは
年のくれぬる（美濃家つと）やそらふは俗は見あはせゐるといふ意
○やすらはん（源椎が本）三 宮はおらひ給はぬ御ありきはなやましくおぼされてこ
こはやそらはんの御こゝろもふかければ打やすみ給ひて
○補 やそらはで（後拾）戀二、赤染衛門「やはらはでねなましものをさよふけてかたぶくまでの月を見しかな
○やすらはまそし（源夕顔）十二 せなのかげは猶やすらはまほしきは
○やそらむき（源若紫）廿一 いみじきせなのかたはもおぼしやはらはぎ立かへり侍ら

んはあかぬわざかな
○やそらへば（源若紫）四十七 西の對に御車よせており給ふわかぎみをばいとかるらかはかきいだきておろし給ふ少納言猶いと夢のこゝちし侍るをいかはし侍るべきことかなとてやそらへば
○やそらひなして（源末摘）卅四 日さしいづるほどにやすらひなして出給ふ
やそむ（續世繼）序 こかげはたちよりてやそむとて（頼政集）下「あふ人もなきこひぢゆくゝるしさはやすむまとては身をぞうらむる 補（風雅）雑中、宗尊親王「見わたせばつま木の道の松陰に柴よせかねてやそむ山人（濵松）上一、いみじうゝれひをやそめおもひそのぶることはおもへり
やそく（拾）秋 よみ人しらず（貫之集）「ちりぬべき山のもみぢを秋霧のやそくもみせぬ立かくれらん（源少女）三十 まかでさせ奉りておほゝろやそくうちやすませ奉らん
○やそき（源総角）廿九 御心のうつろひやそきは（古）春下 みつね「けふのみとはるをおもはぬ時ざにもさつことやそき花のかげかは
○やはきおと（源東屋）十一 かへすがへすかしこまりながらおふせのでと奉らんはやすき事なれど（狭）二上十四 いとゞ只今なくなりぬる身ともがなとおぼされてやそき事と

い身もうきぬべゝりゝあがれさる御涙いとこゝろぐるゝくわりあきゝ（枕）四十〇雪山ノ所木守ノ詞いとやすき事たゝりゝ守り侍らん（榮見もてぬ夢）四十いでたゞおのれゝあづけ給へれとやすきことゝて

○やすゝ（源東や）五十六おやせでとをつゝへゝへらんことゝいやをゝ

やをまり（空穗俊蔭）四十七つゝひ人ひとりえゝらんやうゝゝよりありて覺め朝ゝいでゆふべゝりゝへりゝいとまのなさもやすまりぬ（同）五十六けふやゝゝと身をせゝりゝつべく魂のやをまる時おくておそろゝくゝなゝきめをゝ侍らん云々補（榮玉のうざり）十三よるもみゝうゝもまゐらねばやゞてすのあゝおみゐてかうらんゝせおゝをあてゝそれをやをまりにねふりあつまり給ふ

やすまん（空穗俊蔭）中さてものゝ給ハゞこのゝ一つゝてもやをくまゐらせんまゝりありくことやはまん云々

やすけ（源榊）八何事も人ゝもどきあつゝれぬべきハゝやをげおり（同須广）四十六やすげなきゝのうれへを申を（同胡蝶）廿五まゝていとあハつけうまち聞覺さん事と万ゝやすげなうおゞゝゝだる

やすめ（古）序花のかゞゝやをめるゞことゝ（源手習）初おりゝりける人の家有けるゝとゞめてけふぞりやすめ奉る

やすめどころ（源玉葛）四十六むゝゝのけさうのをゝゝきいどゝゝハあゞ人といふいつもゞをやすめ所ゝ打おきて言のもつゞきゝよりある心ちすべゝめりおどもらひ給ふ

やすゝ（源玉葛）廿八足のうら動ゝれをゝびゝけれバせんのゝおくてやをみ給ふ（源空蟬）十一おもゝうちやをゝ給へゞねられ給ハを（更科日記）十此水のつらゝやをゝつみれバ（源花の宴）四うへの人々もうちやをゝて補（貫之集）人の木ゝもとゝやすゝて

増補雅言集覽卷之卅五終